

---

# 転生したのに竜人（ドラゴニア）！？

天水紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生したのに竜人<sup>エリミア</sup>！？

### 【Nコード】

N4734X

### 【作者名】

天水紫苑

### 【あらすじ】

彼女が出来た翌日、ヤンデレの義妹に刺されて死んだ少年は、剣あり、魔法あり、魔物ありの世界に転生する。だったら第二の人生楽しむぜ！と意気込む少年はなんと竜人として転生しちゃいました。これじゃあ人間の女の子とイチャイチャできねえ！そんな問題も魔法でどうにかしちゃいましょう！性転換などなんのその、種族が違い、性別が同じだろうと、俺は普通の女の子をゲットする！しかし、そんな少年の欲望とは裏腹に、降り懸かる困難の数々！彼、いや、彼女の進む先にあるものとは！？そんな少年（少

女（ ）の異世界記でござります。

## プロローグ（前書き）

最初こそ重たいですが、本編が始まったらはっちャける予定です

## プロローグ

突然だが、俺はもうすぐ死ぬと思う。

それというのも、腹にグツサリとナイフを刺されて、しかもそれが今は引き抜かれているからだ。

最悪なことに本日は雨で、俺は人通りの少ない薄暗い道に倒れている。深い傷口からは、今もドクドクと温かい液体が流れている。

呼吸がうまくできない。俺の口は、俺の妹の口で塞がれているのだから。

先日俺には彼女が出来た。高校二年生である俺としては、エッチなことに興味はあったし、彼女のこと好きだった。

明日に希望が持てた。未来に夢が抱けた。

だけどそんな希望と夢は、無残にも打ち砕かれた。

孤児だった俺を、何も言わずに拾って、無償でここまで育ててくれた、お父さん。

血は繋がっていなくても、俺にとっては大切なお父さんだった。

お父さん、俺はあなたに恩返しするために色々な勉強をしてきましたが、全て無意味だったようです。

ただありがとう、俺をここまで育ててくれて。

出来損ないだった俺を、心から慕ってくれた義妹。

お父さんの娘で、俺の一つ下だ。

妹よ、俺はお前に刺されたことを恨んではない。

お前の好意に気づけなかった、俺の落ち度だったのだ。

妹が俺を刺した時、俺はおぼろげにその言葉を聞いた。

「お兄ちゃん大好き、ずっと一緒にいようね。あんな女は忘れてね」

そう言っただけは、俺にキスをして、自分の心臓を自分で刺した。

ずっと一緒にいよう、それはつまり、あの世でということか……？  
だがそれは嫌だ。俺はまだ死にたくない。

まだ知らない、楽しいことだってあったはずだ。

今までだって楽しかった。

それと同じくらい楽しいことが、まだまだある筈なんだ。

正直に言えばエッチなことでもしたいです、はい。

だって絶賛性欲発生中の高校生だぜ！？ そりゃあんなことやこんなことに憧れますよ。

しかも彼女がいたんだぜ！？ 生殺しもいいとこだよ！  
というわけで、死にたくないです。

神様でも誰でもいいです。

もしもまだ俺が生きられるのなら

この世界じゃなくなたって構いません。切実にマジで。

薄れゆく意識のなか、俺は心の中で、そう叫び続けた。

そして、ボンヤリとする視界で、俺が最後に見たものは、とても神々しい、綺麗な光だった。

そして俺の長いようで短かった十七年は、終わりを告げた。

## ● 零話 新たなる命の始まり

ここはどこだろう？

周りは……お湯？ なんだかとても温かい……。

俺はたしかに、あの時死んだはずだ……。

じゃあどうして、俺はここにいるのだろう……？

暗い……。

何も見えない……。

「  
！  
！  
「！  
「！

誰かの声が聞こえる……？

ダメだ……、頭がボンヤリとしてきた……。

俺は……、僕は……、私は……、誰？

そこにいるのは……誰？

私の体が、内側から押し出され、徐々に大気に触れていく。  
段々と外に出てきた私の体を、誰かが掴んだ。  
私は、その驚きについての言葉を

「あう……うえ……？」

こぼした

## 一話 竜人になっちゃいました

俺は世に言う転生を果たしたのだろう。最近ようやく記憶がはつきりとしてきた。

朝起きて真っ先にこんなことを考えるのはどうかしていると思うが、これが事実なんだからしょうがない。というわけで、あの時の祈りが通じたのか俺は転生しました。はい。妹のことはもう最初から恨んでいない。こうして生きているんだ、もうあつちのことは忘れよう。

それはさておき

前世の記憶が戻るまで、俺は自分が女であることに違和感を感じていなかった。

しかし、徐々に取り戻していった前世の記憶により、俺は男だと思い出すことが出来た。

危ない危ない、あのままだったら俺は、身も心も女になってたぜ。

いきなりすぎてわからなかったか？

実は俺、女になってた。しかも普通に私とか言ってた。更に言えばスカートとか穿いてた。

今思い出すと泣きたくなるね。まあそれは今は置いておこう。

さて、俺も五歳になり、両親からこの世界について色々聞いている。まず前提として、ここは俺が元いた世界ではない。細かく言えば、地球ではない他の惑星という可能性もあるが、面倒なので異世界ということにする。

この世界は、科学がまだまだ発達していない。簡単に言えば、よくあるRPGなんかと同程度かそれ以上くらいだ。国という概念はあるみたいだし、領主がどうのここの、とも言っていたので、RPGの世界よりは進んでいると思われる。

まあ、俺としては科学が進歩していないことよりも重要なことがある。

それは、この世界では魔法が使えるということだ。俺がそれを初めて知った時、自分に使えるかどうかわかったわけでもないのに、喜びの舞を踊ったほどだ。

この世界でいうところの魔法とは、一般的な何でも出来ちゃう凄く便利なもの、ではない。

魔法には相性があり、一人が使える魔法はかなり限られるのだ。

つまり、一つの魔法に特化するというわけだ。

簡単に説明すると、炎を操ったり生み出したりする魔法使いは、それだけに特化していて、他の魔法が使えないのだ。

ただし、例外もあって、手を触れずに物を動かしたり、マッチ程度の火を生み出す、という微弱な魔法は、魔力を有する者ならば誰でも使える。

今の説明で気づいた人もいるだろう。

『魔力を有する者』、つまり、この世界には魔力を持っていない、魔法が使えない人がいるわけだ。

種族によってその比率はまちまちらしいが、人間の比率は3：7だ。補足すると、3が魔力を持つ者だ。まあ、それは俺には関係ない。

続いて魔力の説明をしよう。

これは誰でもわかると思うが、魔法を使うための力だ。

魔力が切れると、全く魔法が使えなくなる。そして、魔力を全て使い切り、全開まで回復すると、魔力の最大値が上がるのだ。

まあ、これはオンラインゲームなんかでもよく見かける仕様だ。

理論はよくわからないが、魔力を使い切ると限界値があがる。

魔力というものは、心に宿っていると伝えられている。

体に体力、魂に命力、心に魔力、それぞれがそれぞれに宿っている。魔力、と言っても使い道はただ魔法のエネルギーになるだけではないらしい。

詳しいことはまだ聞いていないのでわからないが、なんだかワクワクする。

命力についてはあまり詳しく聞けなかった。だから、とりあえずこれは置いておく。

ここで、なぜ魔法は使える数かなり限られているのか考察してみよう。

魔法とは、『因果を自分の望むようにねじ曲げる』力だ。

それはつまり、現実を変える力であると言える。  
そこで俺が考えたのは、その人間の理想や夢が関わって来る、とい  
う仮説だ。

『自分だけの世界』

誰にも犯されることのない、自分の理想の世界。  
それを作り出すための魔法。

沢山の生物が生きているこの世界を、自分の好きなように改変する  
のが魔法。

ならば、その魔法は、その世界を構築するのに必要な分だけあれば  
いい。

だから、魔法は使える数が限られるのではないか？

まあ、あくまで仮定であり、俺の勝手な妄想だ。

俺がこんな妄想に走ってしまうのにもわけがあるってことだよ。

性別が変わって女になりました、そこまではまだいいよ。許容範囲  
だよ。だってそれなら百合に走るまでもん。ああ、ばっちこいだ  
よ。

でもさあ、種族が変わるなんて聞いてねえよ！ 竜人ってなんだよ

！ こん畜生！

俺は普通の人間の女の子とイチヤイチヤしたいんだよ！

いやまあさ、竜人つってもそんなに人間と変わるわけじゃないんだ

よ。  
体の一部にうつすらと鱗があったり、耳がちょっととんがったりして  
るだけなんだよ。  
なら問題ないだろうって？ いや大ありだ。  
なんたって

人間は竜人を恐れてるからな

竜人って結構珍しいんだよ。それで、会ったこともないのに危険だ  
と思ってる人が多くてさ。

俺が住んでる竜人の村の付近にある、人間の村の人たちは、俺たち  
と仲が良いんだが、そこよりも先の村とかに行くともうダメだね。  
村人たちがすっかり怯えちゃってんだよ。家から全く出てこないし、  
最悪の場合命がけで戦おうとする大人まで出る有様だよ。

竜人だって人間と変わらない暮らしをしてるんだぜ？ イメージで  
虫とか生肉食ってそうとか言われるかもしれないけど、普通に料理  
して食べてるよ。  
家だとちゃんとあるし、本とかも読む。人間と変わらないんだよ、  
本当に。

なんかこういうこと考えてると憂鬱になるな……。二度寝しようか  
な。

はあ……。

## 二話 デイオーネ家の日常

結局二度寝はしないで、ベッドからのそのそと起き上がり、寝間着から普段着に着替える俺。

さて、俺は現在五歳なわけだが、未だに固有魔法が使えない。固有魔法というのは、さっきの使える数が限られるタイプの魔法だ。しかし、一般魔法である、念動や発火などは使うことができる。俺としては魔力があるということでもかなり嬉しいのだが、なんかこう、ちょっと残念だったりもした。理由はいざれ話そう。両親は魔法を使えるだけで凄いと褒めてくれるが、期待が大きかった分、あの時のショックは相当だった。

魔法と言っても、単調ではない。固有魔法や一般魔法といった分け方があるように、広範囲影響型や自己強化型など、色々な分類をされている。そして実は、魔法使いも大きく二つの分類に分けることができるのだ。

一つは内包系魔法使い。

今まで説明した通り、自分の心に宿った魔力をエネルギーに、魔法を使う魔法を使う魔法使い。

この説明に違和感を感じる人は正しい。魔力を持っていなければ魔法は使えないのでは？ 実はそうでもないのだ。

二つ目が、所持系魔法使い。  
強力な魔力結晶を埋め込んだ武器やアクセサリを使い、魔法を使う魔法使いだ。  
魔力結晶だけでは魔法を発動させることはできないが、魔力結晶をなにかと組み合わせ、そのイメージを固めることにより、誰でも魔法を使えるになる。

例えば、火の魔力結晶を埋め込んだアクセサリを持っているとすれば、火を操るイメージを持つたりすることで、魔法を発動出来る。ただし、魔力結晶は値が張るし、使う度に小さくなって最後には使えなくなる。

更に、威力や精度が内包系の魔法使いよりも劣るので、所持系の魔法使いはあまりいない。

魔法の説明は大体こんなもので良いだろう。

俺はそんなことを考えている間に完全に着替え終わり、部屋から出た。

日本の家でいうところのリビングで、お父さんが椅子に座っている。俺はお父さんの対面の席に座り、お行儀よく背筋を伸ばした。

「おはよう、マリア」

「おはよう、お父さん」

俺は屈託のない笑みでお父さんに笑いかける。

今さらっとお父さんの口から出た名前が、俺の名前だ。

ちなみに、普通に会話してるのは、転生モノでよく見かける、勝手に翻訳されてる！ というモノのおかげではなく、小さい頃から毎日その言語に親しんできたおかげだ。意思の疎通が出来ないと色々と困るので、俺は言葉を何度も練習した。

今では五歳にして随分流暢に話せるようになった。

お父さんは大柄な竜人で、髪は真紅、瞳は碧だ。

顔は随分整っていて、前世の俺なら、リア充は爆発しろ！ と言っていただろう。

しかし今の俺に取っては優しいお父さんだ。

元の世界のお父さんを思い出す時もあるが、今は充実している。

「お兄ちゃんはまだなの？」

お兄ちゃんことソルテオ、通称ソルは、まだ起きていない。

お父さんに似た整った顔立ちで、髪も真紅、ただし瞳は金色だ。

ちなみに俺が女の子言葉で喋っているのは許してほしい。

今までずっと普通だった娘が、突然男口調になったら親も悲しむだろう。

「もうじき起きてくるだろう。それより、文字は読めるようになってたのか？」

「簡単なのはね」

前世の記憶を取り戻してからは、頑張つて文字の読み書きの練習をしている。

喋ることと書くことでは大違いで、これが結構大変だ。

しかし、文法としては英語よりも日本語に近かったので、完全に覚えるのにあまり時間は掛からないだろう。

俺はこうしてちやくちやくとこの世界に馴染んでいるが、まだまだわからないことも多い。

まず一つに、魔物の危険性と、魔獣や霊獣、神獣についてのこと。

魔物というのは歪んだ魔力で人為的に生み出された生命体のことを指す。

魔獣とういのは魔力の影響により突然変異した動物。

霊獣というのは神の加護を受けた獣で、魔獣や普通の獣よりも強く希少。

神獣というのは神に最も近いとされている獣で、とにかく凄いらしい。

俺としてはもう少し詳しく知りたかったが、危険なことにはあまり興味を持つなどのことで教えて貰えなかった。

他にも、どんな種族がいるのかや、ここが具体的にどういふ場所なのか。

この国の首都はどこなのか、など。

色々知りたいが、あまりしつこく聞き過ぎても怪しまれると思い、自重している。

「おはよう、お父さん。それにマリアも」

「ああ、おはよう」

「！？ お兄ちゃんか……、おはよう」

考えごとをしていたせいで、ソルが起きて来たのに気がつかなかった。

ソルは俺の隣に座り、だらしなく猫背になった。

俺よりも一歳年上だが、勉強嫌いで怠け者。

しかし腕っ節は強く、この村の子供の中では一番強い。

「ソル、行儀が悪いぞ」

「あ、そうだった」

お父さんに姿勢を注意されて、俺のように背を伸ばす。

最初の頃こそ俺もきつかったが、慣れればそうでもない。

全員が揃ったところで丁度良く、お母さんが料理を運んできた。

「あら、二人ともおはよう。今日はガルブタのお肉を使った野菜炒めよ」

「うわ、野菜炒め……」

「おいしそう……」

ソルは野菜てんこ盛りの皿を見て露骨に嫌そうな顔をする。

しかし俺は野菜も余裕で食えるので、その皿に乗った料理は凄いいしそうに見える。

ちなみに、ガルブタというのは地球の豚よりも一回りほど大きく、脂の乗りがいい豚だと思ってくれば良い。

「この世界を創りし神、この世界を護りし精霊、我はあなたたちに感謝します」「」

お母さんが椅子に座ると、四人で挨拶をする。

日本で言う頂きますだ。

神が創った世界を精霊が護っている、なんともわかりやすい言葉だ。

その言葉を言い終わると、食卓は戦場が変わる。

大皿に乗った野菜炒めを分けることなどせず、皆で一斉にガツガツと食べていく。

そんな中、お母さんだけは優雅に食べている。しかしそのスピードは誰より早い。

まるで野菜炒めがお母さんの口に吸い込まれるかのように消えていくのだ。

それに負けじと全員で食い下がる。

ものの数分もしない内に、大皿の上の野菜炒めはなくなった。

俺が一番食べられる量が少ないが、一番食べる量も少ないので問題はない。

そうそう、この世界で思いもよらず良かったことは、米があったことだ。

炊飯器はないが、飯ごうと同じようなものでお母さんはご飯を炊いてくれる。

食事が終わるとお父さんは狩りと畑を耕しに行く。

お兄ちゃんはそのお手伝いで、俺はお母さんと勉強だ。

リビングの毛皮が敷いてある床に座り、俺は絵本を広げる。

それをお母さんがゆっくり音読してくれるのだ。

お母さんは綺麗な銀色の髪に、金の瞳を持っている。

ソルの瞳が金色なのはお母さんの血を引いているからだ。

お母さんの顔をじっと見ていたら、それに気づいたお母さんがニコリと笑った。

俺は少し照れくさくなって絵本に視線を落とす。お父さんが惚れるのも納得の笑顔だ。

数時間の間、音読とざらざらした紙に文字を書く勉強をして、その日の分は終わりとなった。

流石に現代ほどの紙はないが、ざらざらした不格好な紙くらいなら作れるようだ。

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに寝転がる。

ふと、ベッドから起き上がり、自分の顔を鏡で見てみた。

月明かりに照らされたような銀色の髪が腰ほど長さまで伸びている。身長はまだそんなに高くないが、髪は長い方だろう。

碧く輝く瞳が、鏡に映る自分を見つめている。

美少女なんだよなあ……。

そんな風に溜息を吐いた姿もさまになる。将来は美少女になること間違いなしだろう。

ああ、どうして俺は竜人、しかも女なのだろう？

お父さんとお母さんには感謝しているが、悔いがないと言えは嘘になる。

魔法でどうにかならないかな……。そんな都合の良い魔法はないよな。ちくせう！

女の子とキャツキャウフフする夢が……。。

口説き落とすのも大変だよなあ……。、はあ……。

こうして、俺はディオオーネ家に生まれて何回目になるかわからない溜息を吐くのであった。

### 三話 幸せの青い鳥

畑仕事を終えたお父さんとソルが帰って来たところで、昼食となった。

朝と同じように、食卓は戦場と化しており、食事は数分で終わった。俺とソルは、それぞれ勉強と仕事を午前中に終えていたので、午後は丸々遊びの時間となる。

そして俺とソルは今、村の子供たちと遊んでいる。

「マリアちゃん、今日も森に行こうよ」

「うん、私は良いよ。お兄ちゃんは？」

「僕は構わないよ」

俺に森に行きたいと言ったのは、オズという男の子。

俺と同じ年で、活発的な少年だ。

「ケートちゃんは？」

「私も良いよ」

俺が確認を取った女の子はケートちゃん。

俺の一つ下で落ち着いた子、そして可愛らしい。

この村の人口は約二十人で、子供は五人。

とは言っても、その内一人はまだ赤ん坊だ。

実質この村で遊べるのは四人であり、普段からこの集団で遊んでいる。

そして、オズが言った今日もと言うのは、毎日のように森に行つて遊んでいるからだ。

この日も俺たちは村を出て森の深くに入つて行く。

しかし、しばらく歩いたところで、俺たちは獣の群れに囲まれた。そしてその獣たちは一斉に、俺たちにじゃれついてきた。

「よしよし、今日も可愛いね」

俺は青い毛並みの狼を撫でながら、そのもふもふ感を堪能する。

周りを見れば、三人とも他の獣と遊んでいる。

そう、この森の獣たちは、俺たちと仲良しなのだ。

というか、凄い俺に懐いているのだ。

理由はよくわからないが、なぜか俺は獣に懐かれる体質のようだ。

「よいしょっと。よし、走れ」

体長が三メートルほどもある青い狼によじ登り、がっしりと背中にしがみついて走れと命令する。

その言葉が理解出来ているのか、青い狼は悠然と走り出した。

ひんやりとした風が頬を撫で、とても気持ちいい。

「気持ちいい」

「何回乗っても飽きないな」

「落ちそうで怖い……」

周りを見てる余裕はないが、声でソルたちも同じことをやっている  
とわかる。

まあ、乗っている獣は皆違っけどな。

さて、記憶が戻ってからはすでに数日が経過しているが、その間に  
竜人についてわかったことがある。

それは、学習能力や身体能力が、人間に比べてかなり高いというこ  
とだ。

実際、こうして遊んでいても皆振り落とされないと、言葉もハツキ  
リと喋れている。

この世界の人間のことは、まだよくわからないが、恐らく竜人は希  
少であり強力な種族なのだと思う。

それはさておき

数分間走り続けていた青い狼やソルたちが乗っている獣が急に止ま  
った。

俺はしっかりと捕まっていたから落ちなかったが、ソルとオズは落  
ちたようで、俺の前にゴロゴロと転がってきた。

そんなに早い速度で走っていたわけでもないのに、怪我は特にな  
いようだ。

それにしても、どうして止まったのだろうか？ いつもはまだまだ

余裕があるはずなんだが……。

俺は不思議に思い、青い狼から降りて辺りを見回す。

すると、前方に小さな青い鳥が見えた。

翼を怪我しているようで、地面に立ったまま、ピーピーと鳴いている。

俺は驚かせないようにとゆっくり近づき、青い鳥を両手で包み込むように持ち上げる。

「右翼に小さな怪我があるか……。今日は帰った方が良さそうだな」

誰にも聞こえないように独り言を呟き、ソルたちに青い鳥の治療を  
したいから今日は帰る、と伝える。

オズ辺りがぐずるかとも思ったが、全員納得してくれて、俺たちは  
すぐに家に戻った。

とはいえ、俺やソルたちに治療なんて出来る訳も無く、結局はお母  
さん任せになってしまった。

「お母さん、ありがとう！」

「うふふ、いいのよ。お母さんはマリアちゃんが優しい子で嬉しい  
わ」

そう言ってお母さんは俺の頭を撫でる。

過去にこんな経験がない俺は、なんだか照れてしまう。

しかし、なんだか胸の辺りが温かくなったような気がした。

「マリアちゃん、その子、飼いたいの？」

「え？」

お母さんは少し嬉しそうにそう尋ねてくる。

しかし、俺は別にそう言った理由で助けたわけではなかったんだが……。

俺は、幸せの青い鳥を思い出し、なんとなくこの鳥を助けただけだったのだ。

肝心の青い鳥は、俺の肩の上でくつろいでいる。どうやらまたしても懐かれてしまったようだ。

「飼いたくないの？」

「……うん、飼いたい！」

「そう、じゃあ、しっかりと面倒を見るのよ」

「うん！」

これもなにかの縁だろうと思ひ、俺はこの青い鳥を飼うことにした。お母さんもそれに反対する気は全く無いようで、すんなりと許可して貰えた。

これで今日から、この青い鳥は家族か……。

「チル、名前はチルにしよう」

「あら、良い名前ね」

「うん。それじゃあもう少し遊んでくるね」

俺は青い鳥をチルと名付け、肩に乗せたまま家から出た。  
外ではソルたちが心配そうに待っていたが、俺の肩に乗っているチルを見て、安心したかのように息を吐いた。

「マリア、その鳥はどうするんだい？」

「私が飼うことになったよ。名前はチル、皆も仲良くしてね」

こうして、ディオオーネ家に新しい家族ができた。

### 三話 幸せの青い鳥（後書き）

プロローグをかなり変更したので、一度見直された方がいいかもしれません。

しかし、本編には影響がないので、面倒な方は見なくても大丈夫です。

## 四話 魔法の威力

この世界は、十の大精霊によって護られている。

この世界を生み出した創造神は、自分の力の一部を受け継いだ大精霊を生み出し、それぞれに世界を護るよう命じた。

大精霊はそれぞれ、火、水、風、土、木、金、命、死、光、闇、を司る。

更に創造神は、大精霊たちだけでは全てを護りきるのは難しいとし、沢山の精霊を生み出した。

そして創造神はこの大精霊と精霊を生み出した後、自らの力を三つに分け、世界のどこかに隠して眠りについた。

ゆえに、現在世界を護っているのは、大精霊と、その配下である精霊とされている。

これが、この世界に伝わる神話を簡単に説明したものだ。

この世界の一年は十ヶ月に分けられていて、それぞれ、火の月、水の月、風の月……、と続いていく。

時間はなぜか数字で表した二十四時間だが、長さの単位や重さの単位も全然違う。

こんな風に、色々と覚えることが満載な世界で、助かったと思ったのは、物理法則に変化がないことだ。

引力や重力、摩擦に空気抵抗。これらは元の世界と変わらない。

太陽や月なんかも、大きさは違うが存在していた。

さて、どうしていきなりこんな話しを始めたのか、簡単に言えば、

最近ようやく神話を理解したから。  
今までも神話に関する本などを読んで勉強していたが、ちんぷんか  
んぷんだった。  
しかし、最近になってようやくわかったのだ。忘れない内に復習し  
ておこうという考えの結果、いきなり神話を語り出したというわけ  
だ。

それはさておき。

現在とつてもまずい状況にある。  
さっきまでの思考は一種の現実逃避だったのかもしれない。

「グオオオオオオオー!!!」

森の中、目の前に黄色い熊の『魔物』。  
名前は、レモンベアー。気性が荒く、雑食。  
つまり俺、超ピンチ。

こんなことになるならば、安易に探検範囲を広げるんじゃない  
……。  
幸いなことに、今日は一人で来ていたため、他の子供も、チルもい  
ない。  
凄い嫌だが……。魔法を使うか。

「<sup>ライター</sup>発火魔法！」  
「がっ？」

ほんのちよびつと火が出ただけで、他にはなにも起きない。  
レモンベアーも、なにかした？ という感じだ。

一般魔法使えねえー！ー！！ しかも呪文がダセエー！ー！！  
いや実はこの呪文頭に勝手に浮かび上がるんだけど、これを唱えな  
いと魔法が発動しないんだよね……。

そう、俺が魔法を使えるとわかった時、あまり喜べなかったのはこ  
れが原因だ。

「うう……、<sup>インチキ</sup>念動魔法！！」  
「ぐお？」

インチキって！ もう少しあるだろう！ サイコキネシスとか！  
結局、近くにあった小石が一瞬浮いただけで、レモンベアーに外傷  
はない。

無事帰れたら、魔力を上げる練習もしようかな……。

「これでもか！ <sup>マジマジ</sup>生水魔法！」

掌から汗みたいに水が出てきた。しかも数粒だけ。  
ドリップって水滴か！ 俺は水滴を掌から出す魔法を魔物相手に使  
ったのかよ！

万事休す、というか、今ので魔力が切れた。

「チ、チクシヨオオオオー！！！」

「グオウ！？」

最早やけくそで思い切りレモンベアーを睨み付ける。

すると、レモンベアーはビクツと硬直した。

え？ なに？ 俺って凄い眼力の持ち主だったとか？

俺が頭を疑問で一杯にしている隙に、レモンベアーは逃走した。

「た、助かった……」

なにが起きたのかわからないが、とにかく助かった。

俺は安心して地面にへたり込んでしまう。

そして、今のままでは魔法が何の役にも立たないと判断した俺は、その日から魔法の特訓を始めた。

## 五話 ささやかな贈り物

あの日以来、魔法の訓練を毎日続け、今ではようやく日常生活で役立つレベルになった。

ほんのちよびつとしか炎が出なかつたり、小石を一瞬浮かせるだけだつたり、掌から水滴が出てくるだけだつたりと、心が何度も折れそうになつたが、なんとか頑張つた。

そして、日常生活を魔法でサポートするようになってからふと気づく。

この村で魔法を使っている人がいない。

そういえば、俺が魔法を使えるとわかつた時、お父さんとお母さんは凄いい喜んでいた。

竜人は魔力を持つ者が少ない、ということだろうか？

お父さんとお母さんは、いずれ自分の力で世界を知れと言って、必要最低限以外のことをあまり教えてくれない。

だからこそ、こうして自分で考えて答えを導き出しているのだが……。

まあ、俺に取つては竜人が魔法を使える確率が低かろうが高かろうが関係ないだろう。

俺には使えるんだ、他と比較してもしようがない。

俺は頭をブンブンと振り、面倒な思考を頭から追い出す。

今は昼前で、俺はさつき勉強を終えたところだ。

自分のベッドの上で寝転がっているうちに、さつきの思考に行き着

いたのだ。

俺は周囲を見回して、チルがいないことに気がついた。

チルの怪我はもう治っていて、自由に飛び回れるが、あまりそんなところは見ない。

基本的にチルはずっと俺と一緒に、自分から離れることは珍しいからだ。

ちなみにこの前（レモンベアーの時）は俺が置いて行った。

なにかあったのかもしれないと心配に思い、部屋を出ようとしたところで、開けっ放しだった窓からチルが帰って来た。

ただ空の散歩に行っていただけなのだろうか？ 俺は少し疑問に思ったが、特に気にしないでチルを肩に乗せた。

するとその直後、鷺のような鳥が窓から入ってきた。

「うわ！ な、なに!?!」

なにごとかと思い、つい手で叩き落としてしまったが、よくよく見ると、森に住む友達だった。

鳥なんかはチルとも仲がよく、森に遊びに行くとき楽しそうにピーピー鳴いている。

申し訳ない気持ちで窓から入ってきた鷺のような鳥を抱え上げ、ベツドの上に乗せた。

その時に、鷺のような鳥が、足で綺麗な玉を二つ持っているのが見えた。

なんだろうと思いつくりと見てみると、鷺のような鳥は俺にその

玉を差し出して来た。

「くれるの？」

俺がそう尋ねると、鷲のような鳥は首を縦に振り、チルをくちばしで指した。

するとチルは、どこか胸を張ったようなポーズを取っている。

えーと、これはつまり……。

「チルが見つけたの？」

俺の問いに満足そうに頷くチル。

どうやら自分で運ぶのが困難だったようで、友人に運ぶのを任せようだ。

それというのも、この玉、ピンポン球くらいの大きさがある。

片方は綺麗な緑で、もう片方は青。

なんなのかはよくわからないが、とても綺麗で、美しかった。

宝石のように輝いているが、こんなに丸くなる石があるだろうか？

それに、どこか神秘的な力を感じる。

「ありがとう、チル。大切にするよ」

俺は綺麗な玉をポケットに入れて、チルに礼を言った。  
机とかにしまうのも良かったが、なんとなく、この玉は常に持って  
いたくなったのだ。

俺が玉を貰ったのを見て、鷲のような鳥は窓から飛び立っていった。  
そしてチルは、いつものように俺の肩に乗った。  
俺はそろそろ昼飯の時間だな、なんて思いつつ、綺麗な玉を太陽の  
光に当てたりしていた。

## 六話 竜神の宴？

現在、村は活気が満ちあふれている。

お父さんもいつもより張り切って仕事をしたり、少し多めに獣を狩ったりしている。

ちなみに、お父さんが狩りに行く森と、俺たちが遊びに行く森は反対方向なので、友達が狩られることはない。

俺はなにがあるのか疑問に思い、お母さんに聞いてみることにした。

「お母さん、もうすぐなにかあるの？」

「あらあら、そういえばマリアは初めてだったわね」

「？」

「もうすぐ百年に一度の竜神の宴が催されるのよ」

お母さんはニコニコしながらそう話す。

普段から笑っている人だから一見なにも変わっていないように見えるが、家族である俺にはわかる。

お母さんの笑顔が、いつもより輝いていると！ きっとお母さんも楽しみなのだろう。

ここで一つ、疑問に思った人もいるだろう、百年に一度の宴をなぜお母さんが知っているのか。

理由は簡単、竜人がとんでもなく長寿だからだ。その平均年齢は軽く妖人<sup>エルフ</sup>をしのぐらしい。

それにしても、竜神の宴とはなんなのだろうか？

お父さんが日持ちしそうな獲物を多く集めていたところを見ると、実際に飲み食いするのはたしかだと思う。

なんといっても、竜神の宴だし。しかしなぜかそれだけではないような気がする。

「竜神の宴って、なにをやるの？」

「うふふ、秘密よ。明明後日しめごとにはわかるわ」

明明後日、つまり三日後か……。

そういえば、村の男の人たちが、キャンプファイアーのようなものを作っていた。

あれに火を灯して、ボウボウ燃やしたりするのだろうか？

結局お母さんにはそれ以上教えて貰えず、村の子供たちで話しあうこととなった。

大人の人たちに聞かれないように、今は森の中にいる。

「お兄ちゃんは竜神の宴でなにをするか知ってる？」

「いや、知らないよ。僕も初めてだし」

百年に一度、というならば、ソルが知らないのも無理はない。

恐らく、オズとケートに聞いても何も知らないだろう。

「マリアちゃん、明明後日にはわかるんだし、気にしなくていいんじゃない？」

「うん、そのはずなんだけど。なんだか凄く、凄く嫌な予感がするんだ」

大量のリスに囲まれたケートの言葉に同意するが、やはり嫌な予感がする。

なにかが起きるとか、そういうことなのかはわからないが、とにかく回避出来るのなら回避したいことがあるような気がするのだ。とはいえ、竜神の宴がどんなものかわかったところで、なにか出来るとは思えないが。

「きつと気のせいだよ！ マリアちゃん、こんな時は魔法で気分転換しようよ！」

「それはオズが見たいだけでしょ」

元気いっぱいいなオズに、ソルが的確な突っ込みを入れる。

前に皆の前で魔法を披露したら、オズがやけに気に入ってしまったのだ。

しかし、オズの言うことももっともだ。気のせいという可能性もある。

「仕方無いなあ……。それじゃあ最近出来るようになったってお

きだよ！  
念動魔法！  
サイコキネシス

同じ魔法でも、威力が変わると呪文も変わるらしく、レモンベアーと遭遇した時は”インチキ”だった呪文も”サイコキネシス”という、立派なもの変わった。

とはいえ、どんなものでも自由自在に動かせるほどの能力なく、今はオズをギリギリ浮かせられる程度だ。

「わあー！ 凄いよ！」

それでもオズは、自分の体が宙に浮いたのが感動だったらしく、しきりに凄い凄いと騒いでいる。

しかし、今の俺の全力がオズを持ち上げられる程度だということは、全力状態が長続きするわけもなく、ものの数秒で魔力が底をついた。

「ふう……、やっぱりまだまだかな……」

「いや、充分凄いと思うよ」

ソルは魔法をここまで使えるようになっただけでも凄いと褒めてくれた。

オズは未だに目を輝かせているし、ケートは俺を憧れるような目で見ている。

しかし、俺としては、一般魔法を戦闘に使えるくらい強くなりたいと思ってしまう。

だって、固有魔法が全然使えないし……。

結局今日は竜神の宴についての話し合いから、魔法のお披露目会になつてしまった。

しかし、そんな風にふざけている間は、妙な胸騒ぎも忘れられたのだ。

## 七話 竜神の宴

あつという間に三日が過ぎて、今日は竜神の宴の日。朝から皆張り切っている。

キャンプファイアーの焚き火をする土台からちよつと離れたところに大きな机や椅子が沢山置いてある。

恐らくそこで飲んだり食ったりの騒ぎを起こすのだろう。

村の女性陣は朝から色々な料理の下準備をしている。

元の世界とは素材からして違うので、何を作っているのか全くわからないが、お母さんたちが作るものなら何でもおいしいだろう。

そんな食材の中に野菜を見つけたソルは、「げっ」、と小さな悲鳴を上げて、顔を引き攣らせていた。

女性陣に大して男性陣はというと、前日までに準備をあらかじめ終えて、今はなにやら話していた。

嫁自慢や子供自慢のようで、近づいたら見世物にされる気がして俺は距離を取った。

そんな中、子供たちはどうしているのかと言うと、またしても森で遊んでいた。

最初は俺を含めて全員で手伝いをしようかと思ったのだが、お母さんたちにやんわりと断られた結果、いつものように獣たちと戯れることになった。

「よし、いけ！ 私のゴーレム！」

「リスちゃん、勝つて！」

「マリアのゴーレム頑張れ！」

「リス勝て！リス勝て！」

今現在、俺の念動魔法で動かしている小人型にした土の塊と、森のリスたちのボスが相撲を取っている。

俺のゴーレムの応援をしているのが、俺とソルで、リスの応援をしているのがオズとケートだ。

今までの戦績は、ゴーレムが三戦二勝一敗で、リスが三戦一勝二敗だ。

俺はゴーレムを巧みに動かし、リスを翻弄して一気に投げ飛ばそうとするが、リスはギリギリで踏みとどまった。

そしてそこで、勝負は決した。俺の魔力が切れて、ゴーレムが、ぐちゃりと崩れたからだ。

前に負けた時も俺の魔力切れが原因であり、この勝負はリスがどこまで持ちこたえられるかに全てが掛かっている。

俺としては自分のゴーレムが負けてしまったのは悔しいが、良い戦いをした相手、リスを称えて、握手をした。

そんなこんなで時間は過ぎていき、夕方になった頃に村に戻ると、もうすぐ宴が始まるところだった。

料理はおいしいかなー、なんて考えつつ、うろつくと歩き回っていたら、いきなり焚き火の土台が燃え上がり、凄い勢いで炎が巻き上がった。



『【獣を統べる竜人の王、災厄の運命、罪の炎】さらばだ……』

その言葉を最後に、声は全く聞こえなくなった。そして直後、静寂に包まれていた村が、やかましいほどの喧噪に包まれる。

「竜人の王だつてよ！ 誰だろうなー！」

「いやいや、災厄の運命が重要だろ！ どういうことだ！？」

「罪の炎つてなんだなんだ！？」

大人たちが一斉に騒ぎ出す。

しかしその表情は、凄く活き活きとしている。

俺はなにがおきたのかわからず、ずっと硬直したままだ。

「うふふ、驚いたかしら？ 今のが竜神様よ」

「竜……神……さま……？」

「そうよー。百年に一度、竜人に道を示してくれるのよ」

お母さんがいつの間にか俺の近くにおいて、微笑んでいた。

じゃあさっきの炎は、その竜神様が……？

それより、竜人に道を示すって、竜人は他のところにもいるはず……

…、ああ！

だから姿が見えなかったのか？ 声だけを、全ての竜人に届けていたってことか？ だから直接頭に響いたのか？

「あらあら、難しく考えなくていいのよ。今日は楽しい宴なんだから」

「う、うん……」

考えたってわからない。

それに混乱しすぎて途中から竜神様がなにを言っていたのか覚えていない。

なんか、王とか運命とか言ってたような気がするが、思い出せない。まあ、俺には関係ないことだろう。

結局その後は変わったことなど起きずに、普通の宴だった。

皆が羽目を外して大騒ぎしている。

酒で潰れてしまい、外で寝ている人もいる始末だ。

俺もなんだか今日は疲れてしまった。

皆はまだ騒いでいるが、俺は一足先におやすみすることにした。

闇に潜む、悪意に気がつかずに

## 八話 別れは唐突に

熱い……。どうしてこんなに熱いんだろう……。？  
今は風の月で、まだこれほど熱くはならないはずだ……。  
熱い……。まるでサウナに入っているみたいだ。

俺はあまりの熱さに耐えきれず、被っていた毛布をどかして、起き上がった。

外からまだ騒ぎ声が聞こえていると言うことは、俺が眠ってからまだそれほど時間が経っていないのだろう。

とりあえず下に降りよう。そう思った俺は、部屋のドアを開いて硬直し、戦慄した。

燃えているのだ。

家が、ゆらゆらと揺れる赤に染め上げられている。

嫌な匂いがする。家の中にあるものが、どんどん炭に変わっていく。なにがおきた？

俺は急いで部屋に戻り、窓から外を確認する。

そしてまた、驚愕する。

燃えているのだ、全ての家が。燃えていないところなどどこにもない。

家だけではなく、村までもが赤く染められていた。

どういうことだ？

宴の炎がここまで拡大するわけがない。

これはどう考えても、人為的な放火だ。

でも誰がそんなことをした。

幸いなことに、外には人がいる。

なにやら焦った表情で村の出入り口まで走っている。

どうする、どうやってここから脱出する？

窓は通れるが、ここは二階だ。

落ちた場合、いくら竜人でも、五歳の体ではどうにもならないだろう。

しかし、正面突破も無理だ。

外に出る前に焼かれる。

俺がああでもない、こうでもないと考えている内に、炎がドアを焼き尽くし部屋に侵入してきた。

どうする、なにか良い策は……。どうにかしようとして冷静に考える俺。しかし、大事なことを一つ見落としていた。

俺の体がいきなり重くなり、視界が霞んだ。

めまいがして、床に倒れ込む。

「ゲホッゲホッ！」

ガスを吸い込んでしまったのだ。

俺はここから出ることにだけに囚われて、他の対策が出来ていなかった。

段々意識が薄くなっていく。

体が動かない。凄い眠気に襲われる。

俺は二度目の死の予兆を見ていた。

思えば、妙な胸騒ぎはあの時もしていた。

元の世界で妹に刺される前、嫌な予感がしていたのだ。

それで気がつくべきだった。

俺に死の気配が迫っていたと。

しかし、今更考えても後の祭り。

すでに俺の体は動かない。

「プー、プー」

意識を失う寸前だった俺は、その声でなんとか踏みとどまる。

チルだ。どうやら毛布の下に埋まっていたようで、よじやく出られたようだ。

「チル……逃げて……」

俺は残る力を振り絞り、チルに逃げてと伝える。

しかしチルは、そんな俺の側に心配そうに寄り添い、逃げようとしていない。

「ダメ……死んじゃう……」

俺はもう動けない。だけどチルはまだ逃げられる。

チル、わかってくれ、俺はもうダメなんだ……。

「プー、プー」

チルは俺の頬をつつつき、心配そうに瞳を見つめる。

そうか、離れる気はないのか……。

俺はまた死ぬのだろうか？

どうして俺は、こんなにも無力なんだろうか？

なんで俺は、この世界に生まれたのだろうか？

わからない。

終わりたくない。  
死にたくない。

外からは金属がぶつかり合う音や、怒号が聞こえる。  
これを行ったのは盗賊かなにかなのだろうか？  
どうして、こんなことをしたのだろうか？

いや、どうしてこんなに警戒が薄まっている最高のタイミングで攻めて来れたのだろうか？  
敵は盗賊じゃない？ 今日が竜神の宴と知っていた？

ああ、もう考えることさえままならない。  
意識が濁流に流される。  
お父さんたちは無事なのか。  
オズは？ ケートは？

神様、俺は貪欲です。  
もう一度だけお願いを聞いて下さい。

俺は、この世界で、生きて行きたいです。

九話 目覚めと決意、そしてその先へ……（前書き）

注意を受けたので補足します。

マリアが助かったことと、神にお願いしていたことは関係ありません。

ちょっとした仕様ですので、気にしないで下さい。

九話 目覚めと決意、そしてその先へ……

逃げる、なにかが俺を追いかける。

逃げる、必死で走り続ける。

逃げる、真っ赤な悪魔が目に映る。

そして俺は、悪魔に吞まれた。

「うわああああー！！……え？……夢？」

目が覚めると、見知らぬ天井だった。

ここは、どこだ……？

俺は、たしか……、火事で……っ！

「お父さん！？ お母さん！？ お兄ちゃん！？」

あの状況で俺が無事ってことは……、皆だつて大丈夫なはずだ……。今は火事がなんで起きたかなんてどうでもいい。

お父さん、お母さん、ソル、オズやケートだった無事なはずだ！

「おや、起きた見た見たねえ……」

「む、そのようじゃな」

「!?!? えつと、どちらさまですか……?」

最初は気づかなかったが、近くにお爺さんとお婆さんがいた。

この部屋を俺は知らない。

だとすると、この部屋、というか家は、この人たちの家だろう。

でも待てよ……、村の家は全部焼けたんじゃないのか?

じゃあここは……?

「私たちはこの家のもんじゃよ。それよりどうしたんだい、お嬢ちゃん。あんなところで倒れていたなんて……」

「あんなところで? 私は火事で燃えた家にいたんですけど……」

お婆さんは俺に心配そうに聞いてきたが、それよりも気になることがある。

あんなところで倒れていた? いくら燃えていたとはいえ、家があった場所をあんな家というか?

いや待て、あんな燃えている家に居て生きているわけがない。

だとしたら、俺は、家の外にいた? いや、村とは全く関係ない場所にあった可能性もある。

村の近くで倒れていたのなら、その村の子供だと予想出来る筈だ。

「あ、あの、ここってどこですか?」

「知らないのかい? ここは、ナーガールジュナ大陸だよ。とはいっても、ここは国の領域に含まれない辺境の場所さ」

それを聞いて、俺は愕然とする。

ナーガールジュナ大陸、詳しくは知らないが、少なくとも俺が今まで暮らしてきた大陸とは違う。

俺がいた大陸は、ファーフニル大陸。他に詳しくは知らないが、それだけはお母さんから聞いた。

つまり、ここは全く違う大陸だということだ。……いや待て、もしかして異世界という可能性もあるのか？

「あの、私はファーフニル大陸にいたんですけど……」

「ほう、ファーフニルと言えば、魔法大国のところか……。しかし、そんなお嬢ちゃんがここにいるのはいささか妙じゃな」

どうやら世界は変わっていないようだ。

しかし、別大陸にということとは、海を越えているということ。一体あの状態でどうやって？

「ピー、ピー」

「！ チル！」

俺が色々と考えていると、部屋に青い鳥、チルが羽ばたいて入ってきた。

どうやらチルも無事だったようだ。そして、チルは口で何か紙をくわえている。

「おや、この子はお嬢ちゃんの鳥だったのかい」  
「はい……。無事で良かった、チル……」

俺はチルを胸に抱き締める。

当然、力加減はしている。

チルは私に何か伝えようと、紙を突きだしてきた。

俺はその紙を受け取り広げてみる。

それは、お父さんからの手紙だった。

『この手紙を読んでいる時、私はマリアの近くにいないだろう。そして、チルと一緒にいるはずだ。もしも私になにかあった時、この手紙をマリアに渡すようチルに頼んである』

そこまで読んで、俺はチルを見る。

チルは、じつと俺の瞳を見据えている。

チルは利口な鳥だった。人の言葉を理解しているんじゃないかと思う時もあった。

まさか本当に理解していたとは……。

衝撃の事実若干驚きつつ、もう一度手紙に視線を移す。

『チルはただの鳥ではない。私もチルを見た時は、とても驚いた。チルは伝説の神獣、太陽鳥だ。もしもマリアの身になにか異変があった場合、それはチルの力だろう。チルは普段、本来の姿をしていない。まあ、それは自分の目で確かめるといい』

神獣、一度だけお母さんに聞いたことがある。

神に最も近づいた獣で、世界に十数匹くらいしか生息していないと言われている。

しかも、人間がたどり着けないような場所で暮らしている筈だ。

俺はもう一度チルを凝視してしまう。

まさか気まぐれで助けたチルが、神獣？

信じられないが、それならば俺がここにいるのも合点がいく。

きつとチルが巨大化でもして運んでくれたのだろう。まあ想像だが、あながち間違っていないと思う。

しかし、手紙にはまだ文が書かれていたので、一旦チルのことは置いておいて、もう一度手紙を読み始める。

『本題に移る。マリア、例え一人でも、強く生きる。私たちにないかがあっても、誰かを恨むな。マリアは私の娘だ。出来るな？』

手紙の内容はそれだけだった。

だけどそれで、これからの俺の生き方が決まった。

わかったよ、お父さん。あの時の炎が誰のものであったとしても、俺は誰も恨まない。

それに俺は、一人じゃない。チルがいる。俺を助けてくれた、家族がいるんだ。

「お爺さん、お婆さん、一つ聞いて良いですか？」

「なんだい？」

「なんじゃ？」

「お二人は、強いですか？」

俺の問いに、二人は目を丸くして驚いたが、すぐに満面の笑みに変わった。

「「強しさ」」

「では一つお願いがあります」

「なんだい？」

「迷惑は掛けません。だから私を、強くして下さい」

俺の目には、堅い決意の火が宿っている。

強くなる。俺は誰よりも、強くなる。

「ふふ、いいともさ」

「面白い嬢ちゃんじゃな……。しかし、手加減はせぬぞ？」

「望むところですよ」

こうして俺は、優しいお爺さんとお婆さんの元、『最強』を目指す修行を始めた。

一章 温かな日々 了

「Aランクのドラゴンが……」

クソ！ まさかワイバーンだけでなくマッドドラゴンまで出てくるなんて！

Dランクチームのこいつらじゃ絶対に勝てない！

私は暗い森の中を、臨時の仲間と共に駆ける。

「”スパルトイ”！ 大丈夫か！？」

「俺たちは大丈夫だが……、リアとサクソンが重傷だ……」

スパルトイというのは、今回の依頼で私が同行したDランクチームのチーム名だ。

人数構成は六人で、その内、弓使いのリアと、魔術師のサクソンが深傷を負った。

受けた依頼はワイバーンの狩猟だ。

「シャル、お前こそ大丈夫なのか？」

「私は問題ない。それより奴は追ってきているか？」

「今の所、大丈夫そうですが……」

私の名はシャル。剣士、というのが一番しっくりくるな。

私に声を掛けた男はこのチームのリーダーだ。

私たちは七人がかりでなんとかBランクの魔物であるワイバーンを倒したが、その直後にAランクの魔物のマッドドラゴンに襲われた。リアとサクソンは不意打ちに対応出来なかったが、他のメンバーや

私は煙幕を張って、リアとサクソンを抱えながらなんとか逃げ出した。

「しかし、なぜこんなところにマッドドラゴンが……」

マッドドラゴンは高い山の頂上付近に生息しているはずだ。どうしてこんな森の中にいる？ 考えてもわからないな……、ん？ あれは……人か？

私たちの前方に、ローブを羽織り、フードを深く被った小柄の人物が現れた。肩には青い小鳥が乗っている。

そして、私たちの方を見て、少し驚いたような動きをして、近づいてきた。

私たちはとりあえず足を止め、それが何者なのか確かめようとした。

「あの、王都にはどうやって行けばいいんでしょうか？」

顔は見えないが、声からすると女の子か？

しかし、どうして女の子がこんな危険な森を彷徨っているんだ？ いや、今はそれよりさっさと逃げた方がいいな。

「私たちも行き先は王都だ。走れるか？」

「え？ は、はぁ……」



私は少女に必死で忠告したが、少女は止まらず、マッドドラゴンに近づいていった。

そしてマッドドラゴンは、少女にその翼を振り下ろした。

私はそこで目を疑った。少女の体は吹き飛ばされてグチャグチャになると思っていた私は、その光景を見て啞然とする。

指一本で受け止めた？

そんなことが可能なのか？

マッドドラゴンは、ドラゴンという括りの中でも弱い方だが、それでもその一撃は余裕で城壁を破壊するのだぞ？  
それを、指一本で止めた？

62

「あなたがどれくらい強いのかは知りませんが、私と比べるとは間違いなく強いですよ」

「ギ、ギャオオオオー！！！！」

少女はマッドドラゴンを窘めるように話し掛けるが、それを無視してマッドドラゴンは大きく息を吸い始める。  
マズイ！ ブレスだ！

「そうですね……、残念です……。プロミネンス」

「ギャオオオオオオオー！！！！！！！！！！」

少女は右手をマッドドラゴンにかざし、なにか呟いた。  
次の瞬間、マッドドラゴンの体が燃え上がり、口内が爆発した。  
マッドドラゴンは火達磨になり、断末魔を上げながら、息絶えた。

「Aランクのドラゴンが……、一撃？」

私は思わず呟いてしまう。

それにドラゴンは総じて炎に対する耐性が高い。

そんなドラゴンを、炎で焼き尽くした？ どれほど高温の炎を操れるのだろうか？

しかし今の魔法を見ると、この子は火炎魔法の使い手だろうか？

それとも魔術師か？

よくわからない……。果たしてこの子は何者なんだ？

## 十話 出会いは劇的に

世話になったお婆さんとお爺さんに別れを告げ、私は森の中を彷徨い歩きました。

現在私は十五歳。肩にはチルを連れています。

順調に伸びていた身長は、十二歳の時からほとんど伸びなくなりました。

これは長寿である竜人にとっては、仕方ないことなのかもしれませぬね。きつと長い時間を掛けて大人の女になるんです。

というわけで、私はまだまだ小さいのですが、実力はかなり上がりましたよ。

まあ、その代わり何かを勉強している暇がなくて、常識を全然知らないんですけど……。

さて、私の口調、十年前と大分変わりましたよね？

これは、お婆さんやお爺さんと暮らしている内に、丁寧語が定着してしまっただんです。

しかも、何かの弾みで、俺、なんて言ってしまった時は、お婆さんにかなり注意されました。女の子が俺なんて言っちゃダメだって。

そのせいで私はかなり女に近づいてしまいましたね。今でも女性の方が好きですけど。

それはさておき

私は王都に向かうべく森の家から出てきた訳ですが、道がちっともわかりません。

チルに乗って行けば早いのですが、旅はのんびりしたいという考えから、それは却下になりました。魔物は次々に襲いかかってきますが、まあ瞬殺なので問題ないですね。

それにしても、近年魔物の量が増えているように感じます。魔物は自然発生ではなく、人為的に生み出されるはずでしたので、悪い人がなにかやっているのかもしれないですね。

そんなことを考えながら数日歩き続けていました。

正直睡眠が欲しいですが、いくら私でも眠っているところを襲われたらひとたまりもないので、森を出るまでは我慢します。

というかこの森ただけ広いですか。いい加減にして下さい。

しかし、ここで思わぬ事態が発生しました。

そろそろ森を歩き続けるのもうんざりしてきた私の前に、人の集団が見えたのです。

私は思いきって、先頭にいた女性に王都の場所を聞いてみました。女性は私のことを訝しげな視線で見た後、私の手を引いて王都まで案内してくれる言ってくれました。

いやー、よかったです。優しい人で。

そこまで考えたところで、私はふと周りを見ました。

すると、大分深い傷を負っている人が二人いました。

なにがあっただんでしょう？ 旅の途中に襲われでもしたのでしょうか？

私はそこで立ち止まってつい考えてしまいました。  
すると、後方からドラゴンが現れたのです。  
この人たちはこのドラゴンにやられたとすぐにわかりました。

折角私を案内してくれようとした人たちですし、ここは助けてあげ  
ましょう、と思い、私はドラゴンを焼き殺しました。発火魔法も、  
昔より大分強くなりました。  
プロミネンス

そんなわけで、現在私たちは森を歩いています。  
ちなみに、重傷だったお二方は私の魔術で治癒しておきました。  
今は、最初に話し掛けた女性、シャルさんと並んで歩き、色々なこ  
とを聞いています。

「シャルさんは冒険者なんですか？」

「ああ、私はどこにも所属しない、飛び入り専門だがな」

「はあ？ どういうことですか？」

シャルさんが飛び入り参加専門と言うことは、普通チームを組むと  
いうことでしょうか？

やはり少しくらいは知識を得ておくべきでしたね。

「知らないのか？」

「はい。私はずっとこの森の奥の方で過していたので」

正確には五歳から今まで、ですが細かいことは省きましょう。  
シャルさんは私の言葉を聞いて、信じられないといった表情をした  
後、納得したような顔に変わりました。  
さっきのドラゴンのことを思い出したのですね……。

「まず、冒険者になるには冒険者ギルドに登録する」

「それはどこの国にもあるのですか？」

「ああ、総本部はユラン王国にあったはずだ」

ユラン王国というのは知りませんが、少なくともこの大陸にある国  
でも登録は出来るのですね。

他にも興味はありますが、冒険者になるのもいいかもしれませんがね  
……。

「話しを戻すぞ。ギルドに登録して冒険者になると、まずはHラン  
ク冒険者として、依頼をこなすようになる」

「Hランク、ですか？」

「ああ、ランクは、H、G、F、E、D、C、B、A、S、X、の  
十段階に分かれている。ちなみに私やスパルティはDランクだ」

Hから初めて、今はDランクですか。シャルさんやスパルティはそ  
れなりの冒険者だということですね。

しかし面倒ですね……、一気に飛び級出来ないでしょうか？ ドラ  
ゴンの死骸を十匹も持って行けば大丈夫でしょうか？

「飛び級ってできますか？」

「出来ないこともないかもな。過去に三人だけ数ランク飛ばした冒険者がいる」

「そうですか……」

冒険者になった時は大きなアクションでも起こしますかね。

Hから一つずつ上げていくなんて面倒ですし。

「話しを続けるぞ。冒険者になったとしても、一人では依頼が受けられない。これは危険度を減らすためらしいな。貴重な人材が一人で依頼を受けて、死んだりしたら大変だからな」

「二人ならお互いをサポート出来ますしね。なるほど、だからシエルさんは飛び入り専門と言ったんですね」

誰ともチームを組まず、毎回違うチームに一時的に参加するというわけですか。

しかし、そうするとどうやってランクを上げているのでしょうか？  
チームのランクはなにかしら試練でも受ければ上がるのでしょうか、どこにも所属していないとすると、自分のランクを上げられないのではないのでしょうか？

「どうやら気づいたようだな。誰ともチームを組んでいない人は、自分と同じランクの依頼を規定数クリアすれば、ランクが上がる。つまり、Hランクでチームを組んでいない人は、Hランクのチームに飛び入り参加し、Hランクの依頼を幾つかクリアすることで、ランクが上がる」

「なるほど、良く出来ていますね……。そう考えると、そのチーム

を組んでいない人は、同じDランクのチームと比べても、個々の実  
力が高いということですね」

チームでDランクだとすると、連携などもあるので、個々の実力が  
少し劣っていても、Dランクの依頼をクリア出来るでしょう。

しかし、チームに所属していない人は、連携にうまく参加できませ  
ん。つまり、同じ依頼を受けているとしても、一人で戦っているの  
と大して変わらないと言うことです。

もしもの時は助けしてくれるでしょうが、普段はばらばらに戦うこと  
になると思います。

つまり、個人でDランクの人は、チームでDランクの人より強いと  
言うことです。

「よくわかったな。まあそうなる」

「やっぱり外界は面白いですね。王都に着くのが楽しみです」

それからも、シャルさんと色々な話しをしながら森を歩き続けまし  
た。

そして、私の王都に対する期待はドンドン大きくなって行くのでし  
た。

## 十一話 デイオーネの家名

魔術。それは魔法とは異なる進化を遂げた魔の力をさします。

正確な魔方陣を描き、魔力を注ぐことによつて発動する魔術は、魔力を持たない者でも行使することが出来ます。

所持系魔法使いのように、魔力結晶を使用するのです。

ここで、魔術と所持系魔法の長所短所を説明しましょう。

魔術は、あらかじめ魔方陣を用意する必要があり、しかもそれを正確に描かなければならないので、準備が面倒です。

大抵の魔術師は、あらかじめ魔方陣を描いておいた物を所持し、魔力結晶を魔方陣に近づけ、魔術を行使します。中には、魔法と魔術の両方を扱い、魔力結晶を使わずに、自分の魔力で魔術を発動させる者もいますね。

このように、発動までに色々と面倒な魔術ですが、威力に関しては内包系の魔法にも負けません。

ちなみに補足として、私は魔術師であつたお婆さんに大量の魔術を教わりました。

所持系魔法の長所は、使い勝手のよさですね。魔力結晶をはめ込んだ物を持っていれば、いつでも使えますし。しかし、威力が弱く、精度が低いのが短所ですね。

まあ、私は今のところ所持系魔法は使わないので関係ありません。

続いて固有魔法についてある程度おさらいしましょう。

固有魔法とは、魔力を持つ者が使える魔法であり、使える種類がか

なり限られている魔法です。

私でさえ、今使える固有魔法は一つですし。

この固有魔法は、唯一無二の物が多く、私が使っている魔法も、恐らく私だけの魔法でしょう。

固有魔法中でも、自然から力を借りる、火炎魔法や流水魔法は、割とポピュラーですね。

さて、どうして私がいきなりこんなことを言い始めたのかというと、シャルさんに「マリアは魔術師なのか？」と聞かれたからです。果たしてどう答えるべきでしょうか？

「魔術師、というのも間違いではないんですが……、魔法使いでもあり、格闘家でもあり、剣士でもあったり……」

私は俯き、ボソボソと小声で呟きます。

忘れて貰っては困りますが、私は竜人ドラゴンです。

そして竜人は、成長の伸びしろがとんでもなく高い上に、成長速度も半端じゃありません（成長速度といっても、身長ではありませんよ）。

つまり、鍛えれば鍛えるほど強くなり、しかも強くなる速度が異常に早いということです。

そんな私は、お爺さんとお婆さんにかなりしごかれました。

魔術に魔法、剣技や格闘術、他にも、弓や槍、鎚ハンマーなんかのも扱いますで鍛えられました。

ようするに、大体なんでも出来るといいうことです。不本意ですが。

「えっと、まあ魔術師です、はい」

「やっぱりそうか。しかし大した魔力だな。ドラゴンを焼き尽くすとは」

「あ、あはは……」

ドラゴンを焼いたのは発火魔法なんですけどね……。

昔はライターレベルだったんですけどね……。  
思い出すと悲しくなります。

「ふふ、全く未恐ろしい奴だ。もうすぐ王都に着くぞ」

「本当ですか!？」

シャルさんの言ったとおり、大きな壁のような物が見えてきました。  
魔物や魔獣の侵入を防ぐ防壁ですかね。

一力所やたらでっかい門があります、そこから入るのでしょうか？  
私が疑問に思っている間に、シャルさんたちは門に近づき、門番の  
人となにか話し始めました。

気になって様子を見に行くと、丁度私に用があったのか、シャルさ  
んが手招きしています。

「どうしてんですか？」

「いや、王都に入るにはちょっとした手続きが必要なんだ。マリア  
はまだ住民証も持っていないしな」

「え？ 私ここに住むとは決めてませんよ？」

「ああ、だからまずは仮の住民証を発行して貰う。それを貰ってから一ヶ月が経った時、まだ王都にいる場合は、住民証が必要になるぞ。ちなみに、住民証か仮の住民証がなければ、中に入ってもなにも買えないし、宿にも泊まれないぞ?」

怪しい輩が侵入した時のための対策ですか。

中々念入りですね。私の暮らしていた家は魔物が普通に入ってきたので、そんなことは全く思いつきませんでした。

「わかりました。それで、仮の住民証というのはどうしたら貰えるんですか?」

「用紙に名前を書いて提出し、銀貨十枚を払うんだ。そういえばマリアはお金持つてるのか?」

「はい、問題ないですよ」

お爺さんとお婆さんが饞別に色々くれましたからね。

さてさて、ちゃっっちゃと名前を書いて中に入りましょう。

私は注意書きとかが書いてある紙に、マリア・ディオオーネと記入して、受付に提出した。

しかし、それを見た受付の人が、少し驚いた様子で私の顔を見てくださいました。

「なにか不都合でもありましたか?」

「いえ、家名があるのに少し驚いただけです。問題ありません」

そう言った受付の人は、私の名前が書かれた仮の住民証を渡してくれた。

私はそれを受け取り、シャルさんに見せる。

「貰えました！」

「そうか。なにになに……、マリア……、ディオオーネ!？」

「? どうかしましたか？」

「マリア、お前家名があるってことは、どこかの貴族なのか？」

え?………あああああ………!!!

そうです、どうして気づかなかったんでしょう。

前世ではそういう設定が当たり前すぎて全く違和感がありませんでした。

村に住んでいた竜人に、どうして家名があるのでしょうか?

よくよく考えれば、オズやケートちゃんには名字というか、家名はなかったはずです。

「すみません、昔からそれが当然だと思っていました。家名があると貴族なんですか？」

「ああ、普通家名というのは、その貴族の持つ土地から付けられる物だからな。というか、知らなかったのか？」

「はい……」

今更そんなことがわかってても確かめようがありませんが、お父さんとお母さんは貴族だったということでしょうか?

しかし、あの村は領地がどうこうとは関係なかったはずですよ。

だとしたら、あの村に住む前の家名？  
いえ、だとしたらなぜ村に移ったのか意味がわかりません。  
どういうことでしょうか？

「そうか……、まあ気にするな。人は全てを知ることが出来るわけ  
ではない。自分の持つ知識だけで、生き抜いていけばいいのだ」  
「大丈夫ですよ。気にしてはいません。少し、不思議だっただけで  
す」

別にお父さんとお母さんが貴族だろうとなにかが変わるわけではな  
いですね。

それにあの火事の方がよっぽどショッキングでしたから。

「マリア、いつまで顔を隠しているんだ？ 傷でもあるのか？」  
「あ、いえ、そういうわけでは」

この方が旅人っぽい気がするという下らない理由ですし、もうフー  
ドを取っても良いかもしれませんね。

そう判断した私は、両手フードを後ろに降ろしました。そして、口  
ーブの中に隠れていた、長く美しい銀色の髪を掻き上げます。  
一瞬宙に舞った長い髪の毛が、ゆっくりと背中に整っていき、スト  
レートのロングになりました。

私の碧色の瞳が、シャルさんをじっと見つめます。

シルバーブロンドの髪を肩くらいの長さまで短くしています。

瞳の色はヒスイ色で、凜とした顔立ちの格好いい女性です。  
男口調が様になる人ですね。

「驚いたな、まだ十歳程度の子供だとは……、いや竜人か？」

「はい。私は他の竜人より耳が長くありませんが、よくわかりましたね？」

昔はよくわかりませんでしたけど、最近になってわかってきました。  
私の耳は割と人間に近いのです。また、鱗もほとんどありません。  
まあ、一口に竜人といっても、個体差はあるでしょうから、そこま  
で気にすることでもありませんね。

「勘、という奴だな。いや、それにしたって凄いな」

「止めて下さいよ。それと私十五歳ですから」

「竜人は成長が遅いんだっか。ふむ、しかし珍しいな」

竜人は多種多様な種族が存在するこの世界でも珍しいです。  
シャルさんにも悪意はないのでしょうか。

「じろじろと見てしまってますまないな。それでは行くこうか？」

「はい、急ぎましょう」

気にしないつもりでしたが、不機嫌なオーラでも出してしまったの  
でしょうか？

シャルさんは私に詫びを入れて、王都へと入って行きました。

## 十二話 チンピラと弱っちいお兄さん

王都の中は、とても活気づいていて、賑やかでした。

「うわー！ 凄いです！ 凄いですよ！ シャルさん！」

「そんなにはしゃぐな、子供か」

「子供です」

よくあるツッコミ返しをして、王都を眺めます。

流石に王都というだけあり、それなりに大きな建造物や、城があります。

凄いですねー、いくら精神年齢が三十超えているとは言え、はしゃいじゃいますねー。

「スパルトイの奴らは先にギルドに行つたか……」

「あ、シャルさん、私はもう構いませんよ？ 用事があるならここでさようならです」

助けたとは言え、元々一緒にいる義理はないですしね。

王都に入るお手伝いをしてくれただけでよしとしましょう。

「そうか、すまないな。わからないことがあつたら、雲水の宿まで来ると良い。私は普段そこにいる」

「ありがとうございます。それじゃあ、シャルさん、またいつか」

「ああ、また会おう」

シャルさんは軽く手を振りながら、去って行きました。さて、私はどうしましょう？　まずは寢床ですかね。

「出来れば雲水の宿っていう所の近くがいいですね」

シャルさんには色々教えて貰いたいですしね。

でも雲水の宿に泊まったら気を遣わせてしまうかもしれないし、遠すぎずそれなりに近いところがベストですね。

ではまず、雲水の宿がどこにあるのか、誰かに聞きましようか。

そう思って意気揚々と歩き出すと、誰かにぶつかってしまいました。

「あつ、すいません」

「おいおい嬢ちゃん、すいませんじゃねえよ。どこ見て歩いているだ、ああ？」

面倒なのに絡まれてしまいましたね。

どこの世界にもいるんですね、こつこつチンピラ。

「すいませんじゃダメですか？　ではどうしろといたのですか？」

「へへ、物わかりがいいな。なーに、俺とちょっと気持ちいいことをするだけさ」

「嫌ですね、気持ち悪い。自分の顔を鏡で確認したらどうですか？

ナンパが成功するような顔じゃないですよ？」

相手を煽って攻撃してきたら正当防衛、でいいですね。  
前世の頃はよくこうやって不良に絡まれていましたから。  
鍛えていたから前世でも問題なかったですけど。

「このガキ舐めやがって！」

「おい！ なにやってんだ！」

おや、見て見ぬ振りを続ける民衆の中から誰か出てきましたね。  
どういう風の吹き回しでしょうか？  
というか、邪魔しないで欲しいんですけど。

「子供相手に恥ずかしくないのか！」

「ああ？ なんだテメエは？ 俺は”閻夜の番犬”の者だぞ？」

閻夜の番犬ってなんですかね？

というか私を助けにきたお兄さん、足が震えていますよ。無理しないで下さい。

ああほら、突き飛ばされた。

「閻夜のなんちゃらさん、面倒なんでもう掛かってきて下さい」  
「威勢の良いメスは嫌いじゃないぜえ、へへへ」

転んで腰が抜けているお兄さんから私に向き直り、チンピラが襲いかかって来ます。

闇夜の番犬、恐らく冒険者かなにかのチームでしょう。それなりにいい動きをしています。

「しかし、私の敵じゃないですね」  
「ガアッ!？」

大振りに振るわれたチンピラの拳を避け、鳩尾に三連続で拳を打ち込みました。

するとどうでしょう、チンピラは情けなく気を失いました。

「助けに入って助けられるとはこれいかに!」  
「グボアッ!」

私が弱つちいお兄さんの方を向くと、誰かが息を切らしながら走ってきて、膝蹴りを食らわせました。

言葉から察するに、お兄さんの仲間でしょう。

「なんの役にも立ちませんでした、ありがとうございました」  
「あ、いえいえ、本当になにもしてないから……」  
「全くだ」

私はお兄さんに一応お礼をして起きました。

するとお兄さんは、フラフラと立ち上がって返事をしました。

そして、その連れであるう格好いいお姉さんに引きずられて行きま  
した。

一体何だったのでしょうか？

十三話 番犬狩り（前書き）

なにこれ……、なにこれ！ なにこれー！？

日間ランキング三位……。

なんとなくランキングを見て目を疑いました。

超嬉しいです、ありがとうございます。

### 十三話 番犬狩り

ふむ、どうしましょう。

闇夜のなんちゃらさんを屠ったら、周りの一般ピーポーたちが騒ぎ出しましたよ。

凄い歓声で耳がイカレそうです。

なんか、凄いなお嬢ちゃん、とか、ありがとうお嬢ちゃん、とか言われてます。

「あの、ちよつといいですか？」

「はい！ 喜んで！」

私は近くにいた男性に、私なにかしましたか？ と尋ねました。

すると男性は、興奮した様子で喋り出しました。

「闇夜の番犬は嫌な奴らが集まるチームなんだよ。それに実力もあるから、皆簡単には逆らえないんだ。冒険者ギルドの方も、それほど大きな悪さをするわけじゃないから手が出せないし。だけどお嬢ちゃんがあいつをぶっ飛ばしてくれたから、皆スカッとしたんだよ！」

「はあ、そうでしたか……」

嫌われ者のチームですか……。

ランクは恐らくC程度でしょう。

いずれ報復される可能性もありますか……。

「闇夜の番犬、潰しちゃいましょう!」

「『『『『『ええっ!?!』』』』』」

この先報復に怯えるのは面倒ですし、ボコボコにして二度と戦えない体にすればいいでしょう。

あんまりグロイのは嫌なので、骨を折ればいいですかね。

さてと、まずは居場所を突き止めなくちゃ行けませんか……。

「お目覚めの時間ですよー、チンピラさん」

とりあえず顔面を数発殴ると、チンピラさんは目を覚ましました。なんだか顔が恐怖に歪んでいます。なにかあったんでしょうか？ まあそんなことはどうでもいいですね。さつさとアジトの場所を吐かせましょう。

「闇夜の番犬、とやらに所属しているらしいですね？」

「そ、そうだ！ リーダーに掛かればお前なんかボコボコにされちまうぞ！ 覚悟しておけよ！」

「おお、怖いですねー。それじゃあそのリーダーとやらの居場所を教えて貰いましょうか？ 黙りを決め込むようなら、指を一本ずつ引き抜きますよ？」

「ひっ!」

当然脅しだったんですが、チンピラさんには効果抜群、あっさりと仲間の居場所を吐いてくれましたよ。

そんなわけで、私は王都の一角にある酒場にやって来ました。

街の人たちは、心配そうにしながらも、やっちまえ！ 頑張れ！と応援してくれました。

さてどうしましょうか……。ここは普通の酒場ですし、魔術で消し飛ばすわけにもいきませんね。

「たのもー！」

「「「「！？」「「「」

とりあえず酒場のドアを思い切り蹴り破り、中に入って行きます。しかし驚くことに、中には四人の男性客と一人の従業員がいるだけでした。

とりあえず、私は片手で引きずっていたチンピラさんを四人の男の前に放り投げました。

「闇夜の番犬、ですね？」

「ああ、そうだが……。こんなことをしたからには、覚悟は出来てるんだろうな？」

「そちらの方が絡んできたんですよ？ 私が悪いんですか？」

「んなこたあどうでもいい。問題なのは闇夜の番犬に手を出したってことだ」

「典型的な脳筋ですか……。バカはこれだから困ります」

鎧を着たりーダー格の男が理不尽なことを言ってきます。

あきらかに自分に非があるのに私に責任転嫁してますよ。  
ふざけないで下さい、ぶんぶん。

チンピラさんは省いて、相手は四人ですか。

剣を持っているのが二人、弓が一人、リーダー格は杖、ですか……。あの杖の先にはまっついている物は魔力結晶ですかね……。

「俺たちに喧嘩売ったことを後悔しな！」

「はあ、そうですか」

リーダー格の男が杖を振ると、鎧に描かれている魔方阵が輝きました。

魔術は魔方阵に魔力を流すことで発動します。その時、魔力を受け取った魔方阵は光るのです。

あの魔方阵の形と模様は、炎球ですか。ならばこれで充分ですね

私は手にはめていたグローブの甲の部分に魔力を流し込みます。

すると、うっすらと、青白い膜が手の甲を中心とした円を描くように広がりました。

大きさは、半径が肘まで届くくらいですね。

イメージとしては、手の甲を中心に円盤を付けている感じです。

リーダー格の男が使用した魔術はようやく発動し、炎球が私に迫ってきます。

私はそれを、青白い膜で受け止めるのではなく、受け流しました。方向は、闇夜の番犬の他のメンバー！。

後ろから攻撃されると面倒なので、弓を持っていた男に炎球を誘導しました。

炎球は見事、その男に当たり、男は炎に包まれました。

まあ、あの程度の炎球ならそれほど重傷にはならないでしょう。

「テムエ……、今のはなんだ！」

「魔術師ならそれくらい自分で考えて下さい」

障壁バリヤのこともわからないなんて、どうやら無駄な心配だったようですね。

こんなに弱いなら警戒する必要もありませんでした。

結局それから五分足らずで闇夜の番犬を屠り、二、三ヶ月は仕事が出来ないようにしました。

先に仕掛けて来たのは闇夜の番犬なので、正当防衛です。

酒場の従業員も証言してくれると言ってくれたので問題ありません。なんでも、闇夜の番犬がこの酒場に溜まるようになってから、客足が減っていたそうです。

その従業員さんに、雲水の宿の場所を聞いて起きました。そうしたらなんと、この酒場のお向かいさんだそうです。そしてここは酒場じゃなくて、宿屋だったらしいのです。

私はてっきり、酒場だと思っていました。

名前は、星月の宿。私はそれを聞いて、ここに泊まると即決しました。

これで、住処は確保出来ました。ラッキー、です。

ちなみに、闇夜の番犬は店の外に放り出して置きました。

## 十四話 星月の安息

闇夜の番犬を屠った翌日、私はふかふかのベッドの上で目を覚ましました。

この宿、客が少ない割にとってもいい所です。ベッドはふかふかですし、食事もおいしいです。

闇夜の番犬がいなくなったので、数日もしたらまた活気づくと思います。

しかしそれまでは私の独占状態ですね。

「チル、おはよう」

「ピー」

本当はこの宿、ペット禁止なのですが、私は特別に許して貰えました。

良い事をすると自分にも良い事があるんですね。

私は軽く身だしなみを整えて、一階に降りました。

この宿は、二階と三階が宿泊する部屋になっていて、お風呂や食堂は一階にあります。

ちなみに、酒場と食堂は別々になっています。

「おはようございます、レイオスさん。良い朝ですね」

「おはようございます、マリア様。マリア様があいつらを追い払ってくれたおかげで、今日は気が楽ですよ」

この人は昨日の従業員さんで、名前をレイオスさんといいます。種族は犬人<sup>コホルト</sup>で、私と同じくらいの身長ですが、もう三十歳なんだそうです。

特徴的な犬耳と尻尾が癒やされます。持ち帰りたいです。

「奥さんは大丈夫ですか？」

「ええ、あいつらがいなくなってから大分よくなりました。本当にありがとうございます」

レイオスさんには奥さんとお子さんがいて、今までは三人で星月の宿を切り盛りしていたそうなんですが、闇夜の番犬が来てから、奥さんはストレスで倒れてしまい、お子さんがその看病をしているそうです。

現在レイオスさんしか従業員がいないのは、そのせいです。

「気にしないで下さい。私としても、チルと一緒に泊まるのを許可して頂いて助かりましたから」

「この程度しか出来なくて申し訳ないです。おっと、忘れてました、朝食ですよね？」

「はい、昨日の夕食はおいしかったので、今回も楽しみです」

私は食堂の椅子に座り、朝食を今か今か待っています。

そして、運ばれた料理を見て、よだれが垂れそうになりました。

「おいしそうですねえ……」

「そう言って頂けると幸いです。冷めない内に、どうぞ召し上がり下さい」

「この世界を創りさ ええい待ちきれません！ 頂きます！」

最近私は食事前の挨拶に頂きますを多用するようになりました。この世界の挨拶は長いです。待ちきれないんです。

私は早口に頂きますをして、鶏肉っぽいものを酒やレモンっぽいもので調理した、蒸し焼きのようなものをガツガツと食べて行きます。一々説明している暇なんてないんです！ ただただ、おいしそうなんです！

「ふう……、ごちそうさまでした」

「昨日も思いましたが、凄い速さで食べますね……」

「食卓は戦場ですから」

昔からの感覚が抜けず、食事の時にはいつもがつついてしまっています。この礼儀の悪さで何度お婆さんに叱られたことかわかりません……。

「マリア様、今日はどこに行くのでしょうか？」

「特に考えてませんね。私は知らないことも多いです」

「そうですね……、それでは、もう少し賑わう酒場に行かれてみてはどうでしょうか？ 色々な情報が手に入りますよ？」

「ああ、すみません。私が知らないのは常識とかなので、酒場に行っても教えて貰えそうにないです」

酒場というと、もっと噂のような情報が流れているイメージがありますし。

やっぱりお向かいさんのシャルさんを尋ねましょうか？  
うーん、悩みどころです。

「すみません、力になれなくて」

「気にしなくていいですよ、レイオスさん。私のことは気にせず、奥さんと息子さんのそばに居て上げて下さい」

「マリア様……、はい、ありがとうございます！」

私の言葉に、レイオスさんは感動したような声を上げて裏に回って行きました。

私今いいことでも言ったんでしょっか？

それはさておき

仕方ありません、迷惑は掛けたくありませんでしたが、シャルさんを頼りましょう。

私はこの王国の国名すら知りませんしね。  
知っていることといえば、色々な種族が共存していると言うことくらいでしょう。

竜人である私が恐れられないのも、それが原因ですしね。

まあ、私が竜人だと気づいたのはシャルさんだけでしたけど。

## 十五話 ニーズヘッグ王国

「それで、結局私を訪ねて来たというわけか」

「はい。迷惑、でしたか……？」

私は朝食を終えた後、すぐに向かいの雲水の宿に突撃して、朝食中だったシャルさんを見つけました。

それを見た私は、その料理が食べたくなり、宿の従業員さんにお金を払って作って貰いました。

それを食べ終えた後、シャルさんの泊まっている部屋にやって来ました。

そして今、シャルさんと話し合っています。

「いや、迷惑ではないぞ。むしろ頼ってくれて嬉しい。マリアにはまだ恩が返せていないからな」

「恩、ですか？ そんなこと気にしなくていいですよ。レイオスさんも同じこと言っていましたし……」

恩を売るつもりでやったわけではないのに恩返しをされると言われると、なんだかむずがゆくなってしまいます。

嬉しいんですが、恥ずかしくもあります……。

「レイオスというと、向かいの宿のか？ たしかあそこは闇夜の番犬が住み着いているはずだったが……」

「ああ、昨日ボッコボコにして追い出しました」

「ほう、先を越されてしまったか」

先を越された、ですか……。

まあ、シャルさんがあいつらのことを知っているなら、放っておく  
分けないですよね。

今まで行動に移らなかったのは、実力的に勝てないと自分で理解し  
ていたからですね。

「個人の實力ならまだしも、チームと戦ったら絶対に勝てないでし  
ようしね」

「ん？ それは私のことか？」

「あ、すいません、口に出てましたか」

「気にするな。それで、お前は今向かいに泊まっているんだな？」

「よくわかりましたね。その通りです」

どうしてわかったんでしよう？ 超能力でしょうか？

そんなわけないですよね……。勘？

「わかった、まずは王国について教えよう」

「この王国ですか？」

「ああ、この国は、伝説の勇者の仲間であり、様々な種族間の架け  
橋となった、伝説の鳥人<sup>ガルーダ</sup>、ケメラチア様が立ち上げた、ニーズヘッ  
グ王国だ」

「ああ、あのおとぎ話のような実話に出て来た人たちですか？」

「そうだ」

伝説の勇者。かつてこの世界にまだ国という概念がなかった時、人々を纏め、国を作り出した人物です。

たしか話では、世界を覆った邪悪な災厄を四人の仲間と討ち滅ぼし、その後リントヴルム大陸に大きな国を作ったはずです。

これは神話と同じくらい神聖視されていますが、噂では実話らしいです。

この世界は、五つの大陸が存在するらしく、それぞれの大陸に一つずつ大きな国が存在しているらしいのです。リントヴルム大陸に国を作ったのは勇者らしいですが、他の国を作ったのはその勇者の仲間たちだそうです。

たしか、リントヴルム大陸を中心に海を挟んで、北東、南東、南西、北西の四隅に、ナーガールジュナ大陸、ファーフニル大陸、ニユーズヘグ大陸、ウシユムガル大陸となっている筈です。

それぞれの大陸にある国は知りませんが、ここはナーガールジュナ大陸だったはずです。

つまり、ナーガールジュナ大陸にあるニーズヘッグ王国は色々な種族の仲がいいということになりますね。

勇者の仲間で、鳥人のケマラチア様が立ち上げた国。皆の仲が良い。よし、覚えました！

「ケマラチア様の教えを守り、この国に生きる種族は皆仲が良い。それは、竜人であるマリアも例外ではないぞ？」

「そうですね。シャルさんは普通に接してくれますし、レイオスさんも、私が竜人と知ってもなにかが変わるとは思えません」

実際、種族間の仲がいいという話をお婆ちゃんから聞いた時は、信じられませんでした。が、しばらくしてお爺さんとお婆さんも人間だという衝撃の事実を思い出し、納得しました。

この国は、とても居心地がいいです。ケマラチア様に感謝しなければいけませんね。

「現在の王はケマラチア様の子孫である、ロクサリス様でその息子である王子はザルティス様という」

「わかりました。国以外でなにかないですか？」

国のことはなんとなくわかっていけば問題ないでしょうし。実用的な知識も必要ですしね。

「そうだな……、では次は、ギルドについてだ」

「冒険者ギルドですか？」

「それもあるが、それだけじゃない」

なんだか楽しそうな話ですね！  
ドキドキワクワクしてきました！

## 十六話 旅の標

「マリアは、ギルドがいくつあるか知っているか？」  
「ギルドの数、ですか？ 一つじゃないんですか？」

私は冒険者ギルドしか知らないので、そう答えるしかありませんよね。

この国にある冒険者ギルドの数というのなら、いくつがあるのでしょうか。

王都には一つしかないらしいですが、他の街にもある筈ですしね。

「マリアが知っているのは冒険者ギルドだけだろう。しかし、実際にはそれ以外に、魔術師ギルド、魔法使いギルド、商人ギルドが存在する」

「魔術師に魔法使い、商人ですか」

魔術師ギルドと魔法使いギルドは、冒険者ギルドとは違うような依頼が集まるのでしょうか。

しかし、商人ギルドというのはなんでしょう？

商人の元締めみたいなものですかね？

「そうだ。冒険者ギルドに所属する冒険者は、護衛や討伐などの依頼がよく回ってくるが、魔術師ギルドや魔法使いギルドには、少し特殊な依頼が回ってくる。まあ、詳しくは知らないがな」

シャルさんは冒険者ですしね。知らないのも無理はないでしょう。私としては、どういった依頼があるのか興味がありますけど。そんな私の様子に気がつかず、シャルさんは話を進めます。

「商人ギルドというのは、商人が扱う商品の調達や、決算などを行う。簡単に言えば、ほとんどの商人はこのギルドに所属している。ただし、例外として、独自のルートから商品を仕入れて、個人で商売をしている者もいる」

シャルさんは一通り話し終えたのか、ゆっくりと呼吸をします。今の話から考えると、私に商人ギルドは関係なさそうですね。買う専門で売ることなど考えていませんでしたよ。

そう考えていると、シャルさんがゆっくりと口を開きました。

「さて、補足として、宗教の話があるんだが、聞くか？」

「はい、お願いします」

この際聞けることは聞いてしまおうと思い、承諾します。

宗教、というと、創造神や大精霊の話ですかね？

私は心の中で疑問に思いながら、シャルさんの話しに耳を傾けます。

「神話などの話ではないぞ。この世界には一つの宗教が存在する。創造神を唯一の神として崇める、サンモウ教だ。この国にも神殿が一つ建てられていて、そこに仕える神官は回復や浄化の魔術だけを

覚えている」

「サンモウ教？ 随分ヘンテコな名前ですね」

シャルさんの話を聞いてついそう言ってしまった。

しかしよくよく考えれば、キリスト教やイスラム教もよくわからないですね。

恐らくこのサンモウ教とやらも、誰かの名前が元になっているのでしょう。

「マリア、私は信者ではないから良いが、創造神を崇める者の前でそんなことを口走れば、異端と認定されるぞ」

「認定されるとなにか困るんですか？」

「神殿の者だけでなく、国からも追われる立場になるぞ」

腐ってますねー。国もすでに宗教の手に落ちているということですか。

いや、もしかすると、脅迫みたいなこともあるのかもしれないね。例えば、神殿は強力な戦力を持っていたり。

「では以後気を付けます」

「ああ、そうしろ」

私はシャルさんの忠告をしっかりと聞き、なるべく問題は起こさないようにしようと思いました。

異端に認定されたからと言って、私は別に困りませんが、立場が悪

くなるのは避けたいですからね。  
そんなことを考えていると、シャルさんがなにか聞きたそうな顔で私を見てきました。

「なんですか？」

「……マリアは、どうして王都に来たんだ？ 今まで森に居たんだろ。なにか出てくるための用事でもあったのか？」

「あー、それですか……」

私の最終目標は女だけの耽美な世界を堪能することですが、現在は違いますしねー。

私がもう少し大人だったら、シャルさんも誘惑していたところですよ。非常に残念です。

私の現在の目標は三つあります。

一つは、この世界を知ること。一度は全ての国を巡りたいと思っています。

そうしなければ、将来女性を困った時に色々困りますからね。

二つ目は、この世界の治安を少し良くすることですね。

私の嫁を危険に晒すのは嫌ですから、とりあえず最近魔物を量産しているバカを抹殺しますかね。

三つ目は、家族の捜索です。

私が助かったのはチルのおかげですが、きっとお父さんやお母さん、

ソルたちも生きています。

これは世界を巡りながら探すことになりそうですね。

現在の目標の中に、女性を陥落することがないのには理由があります。

格好いい女性っているじゃないですか？ 女性にモテるような。

私も将来そうなればいいんですが、現在の姿は愛くるしい少女です。こんな状態では女性を落とすどころか落とされます。

そんなわけで、私は長い時間を掛けてゆっくりと計画を進めることにしました。

男に戻ろうと頑張ったこともあるんですよ？ しかし、はい、まあ、これはまたの機会に……。

さて、どうしましょうか？ 果たしてどの目的を言えば良いんでしょうか？

実はシャルさんを狙っているということでしょうか？  
うーん、そうですね、どうしましょう。

「あなたに会うためです」

「……は？」

私が長い間考えていたので、シャルさんは相当重い話しが来ると思っていたようです。

そこに来て、あなたに会うため発言。そりゃあ、は？ と言いたくもなりませんよね。

まあ、そうさせたのは私ですけど。

「シャルさんを嫁にするためです」

「……マリア、わかった。言いつらいことなんだな？ そうだろう？ そうなんだよな？」

なんだかシャルさんが必死です。

どうしたんでしょう？ 確かに言いつらいことではありますが、嫁に隠すことではありません。

「いえ、ただ、生き別れた家族を探したり、悪の組織をぶっ潰すという目的もありますが、それよりも、嫁探しです。はい。というこ

とでシャルさん、結婚しましょう」  
「とんでもないことさなりと言っな！！ しかも結婚しましょうとはどういうことだ！！」

シャルさんは顔を真っ赤にして怒鳴りつけてきます。

とつても可愛らしいですね。やっぱり時間を掛けてコツコツやるのは面倒に思えてきました。

しかし、ここで挫折するわけにはいきません！！

「いいじゃないですか！ 私のどこが不満なんですか！ 一生守りますよ！」

「そういうのは男が女に言う台詞だ！ 第一、私には心に決めた相手がいる……！」

「そ、そんな……ふっ、そうですか。ならば仕方ありません。

諦めましょう」

私はニヒルな笑みを浮かべて、一人で、うんうんと頷きます。  
嫌がる相手に強制するほど、私も鬼じゃありませんよ。

気持ちを切り替えた私は、シャル先生の授業に戻ることにしました。

「というわけで、次はなにを教えてくださいませんか？ シャルさん」  
「切り替えが早すぎる！ さっきまでのマリアはなんだったんだ！  
？」

シャルさんが未だに吠えています。一体どうしたんでしょう？

## 十七話 虹の魔力（前書き）

最後が少し痛いです……。

それと、感想で注意を頂いたので一つ伺いたいんですが、今現在進んでいる物語上で、意味がわからない謎っていくつありますか？

自分ではしっかり説明したつもりでも、読者様に伝わっていない可能性があるので。

それがもし伏線ならいいんですが、特にそういうわけでもないのに伝わっていないというのは困りますので、疑問に思っていることなんかを教えて下さると嬉しいです。作中で説明しますので。

自分でも見逃してる伏線があるとか洒落になりませんし……

## 十七話 虹の魔力

とりあえずシャルさんを落ち着け、ある程度の常識を聞きました。基本的には、通貨の価値なんかを聞きました。

この世界の通貨は、銅貨、銀貨、金貨、虹金貨の四つがあります。

銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚で、虹金貨一枚の価値があります。

そして、銅貨の価値は、一枚で子供のお菓子だったり、数枚でちょっとした道具だったり、日本で言う百円程度の価値があるようです。

ここで、私がお婆さんとお爺さんから頂いた饂飩がいくらだったかを教えてください。

銅貨三十五枚、銀貨四十九枚、金貨九枚、そして、虹金貨が一枚です。

日本円に換算すると、一億九百四十九万三千五百円になりますね。

驚きで言葉が出ませんね。ただし、一枚だけ手紙が入っていて、虹の力を誤るな、と書かれていました。

どういうことでしょうか？ 虹、ということとは虹金貨のことですよね？ 力を誤るな？

「どづいづことだと思えますか？」

「ぶむ……」

私はシャルさんにも手紙を見せて、なんのことかわかるか聞いてみます。

正直私はなんのことが全くわかりません。

しかし、シャルさんは心当たりがあるようで、なにか考えています。

「噂程度でしか知らないのだが、虹金貨は魔宝塊だと聞いたことがある。虹金貨を実際に見るのさえ初めてだから、詳しくはわからないがな」

「……えーと、魔宝塊ってなんですか？」

魔宝塊、ですか……。なんなんでしょう？  
魔の宝の塊？ ええっと、わかりません！  
予想すら出来ません！

「私も魔法関連は詳しくないのだが、魔力結晶の上位存在の様なものだった筈だ」

「魔力結晶の上位存在ですか……。少し、試してみますか？」

「……なにをだ？」

シャルさんがジトツとした目でねっとりと見つめて来ます。

ゾクゾクします！ ビクビクします！

おおっと、それどころじゃなかったですね。

「魔術に決まっていますよー。まあそんなことしなくても触ればわかりますけど」

「なら最初からそうしろ！」

シャルさんは思っていたより怒りやすいですね。

ちよつとしたお茶目じゃないですか……。

ちなみに、高位の魔術師は、魔力の有無を触れることで判断出来ます。

そして、虹金貨はとづくに触っているので、それが魔力を持っているということとはわかっていました。

それも、かなり強力な。

「まあ、よくわかりませんが、この虹金貨はお金として使うのは避けた方が良さそうですね」

「ああ。それとあまり表には出さな。誰に狙われるかわからないぞ」  
「それもそうですね」

私はシャルさんの言葉に頷き、ローブの下に来ている服の裏のポケットにしまいました。

元々ポケットはなかったんですが、自分で縫って作りました。

今現在そのポケットに入っているのは、その昔チルに買った綺麗な石が二個と、今しまった虹金貨だけです。

虹金貨だけでなく、綺麗な二つの玉にも不思議な魔力が宿っていました。

昔は魔術師じゃなかったらから気づけなかったのかもしれないね。

「そういえば、マリアは新しい服を買わないのか？」  
「服、ですか……？ うーん、この下なら変えても良いんですけど……」

わたしはローブをつまみ、その下に着ている服を見ます。  
ポケットくらいはすぐに作れますし、新しい服を買ってもいいかも  
しませんね……。  
正直おしゃれなんかには全く興味がありませんけど。

「そのローブは脱がないのか？」  
「これはダメですね。脱げませんよ」

このローブは脱ぐわけにはいかないですよー！。  
着なくても問題はないんですが、着ている方が手間が掛からなくて  
楽ですしね。  
こついうところで油断している魔術師はダメなんですよねー！。

「ふむ、まあ理由があるのなら仕方無いか」  
「すみません、見苦しくて……」

洗ってはいますが、古いですしね。  
一緒にいて嫌な気分にしてしまうかもしれませんね。  
しかし、これは譲れないんですよ。

「気にするな……っ！ なんだ!？」

「この気配、魔物……。しかもそれなりに強いですね……。どうなってるんですか！ 全く！」

シャルさんが私に声を掛けてくれたところで、強い気配が飛んで来ました。

それと同時に、外の方から悲鳴が聞こえてきます。

私は急いで部屋から飛び出し、宿を飛び出しました。

そして周りを見渡すと、大きな道の真ん中に、大きな獅子の魔物がいて、その獅子が一人の少年を左前足で押さえつけていました。

「グルオオオオオオー……!!!!」

「うわあああああー……!!!!」

獅子は咆吼で周囲を威嚇しています。

そしてすぐに、強烈な殺意が少年に向けられました。

「リオラ ハラ  
光の波動」

「うわあああああー……え？」

しかし、獅子が少年を襲うよりも早く、一瞬、私の右手にはめられている手袋の、平の部分に描かれた魔方陣が光輝きました。

次の瞬間、獅子の上半身のほとんどが消し飛び、その死骸が、ドサリと倒れました。

少年はなにが起きたのかわからないような顔をしています。

しかし、今はそれどころではありません！

「今の魔物はどうしたんですか!？」

「え、あ、地面が光って……いきなり現れたんだ……」

私は近くで腰を抜かしていた青年に詰め寄り、なにがあったのかを聞き出します。

そして、予想通りの答えが返ってきたことに、小さく舌打ちをしました。

「無差別転送魔術……！　どこのバカですか！　こんなことをしたのは！」

「マリア！　なにがあった!」

私が虚空に怒鳴り散らしていると、少し遅れてシャルさんが宿屋から出てきました。

私は、いきなり現れた魔物を倒したことを簡単に話、まだ終わっていないことを伝えました。

「少し、私は消えますので、こいつの後始末をお願いします」

「あ、ああ、わかった」

私は強引に話しを終わらせ、姿隠しの魔術を使いました。

視覚的、聴覚的、嗅覚的に外界から感知出来なくする魔術で、私の

姿が見えなくなり、私の発する音も聞こえなくなり、また私の発する匂いもわからなくなります。

当然、魔方阵は必要なので、あらかじめ用意しておいた、ローブの裏の魔方阵に魔力を流し込みました。

「……………うう、凄く嫌です……………」

正直これはかなりやりたくありません。

しかし、まだ可能性はあるので迷っている暇はないですね……………。

ええい、もうどうにでもなれです！

そう割り切って、私は右手の人差し指と中指で、自分の、碧色の瞳を潰しました。

## 十七話 虹の魔力（後書き）

チルが空気過ぎる……。

大事な相棒ですけど、大きな戦闘以外では出番が少なそうです。



どこになにがあるのか？ どこでなにが起きているのか？ その全てを視ることが出来ます。

これが一番異常を探すのが楽なんです。その代償が痛みですけど。

私は天使の瞳で王都を視て、二体の魔物を発見しました。やっぱり、予想通りです。一体転送してきたら複数いる可能性がありますね。場所はここから大して遠くもないです。

しかし、二体だと片方に対処している内にもう片方がなにかやらかしますね……。

仕方ありません、こつちも使いたい魔術ではありませんが、背に腹は代えられません。

私は天使の瞳を発動させたまま、新たな魔方陣を描くことにしました。

いくら私でも、全ての魔方陣をあらかじめ用意しておくことは出来ません。

そんなわけで、私は指先に付着した血を使い、自分の腕に魔方陣を描きました。

魔力を流し込むと、赤い魔法陣が輝き、魔術が発動されます。

そして、私の目の前に、もう一人の私が現れました。

「俺は遠い方に行くから、お前は近い方に行ってくれ」

「わかりました。急ぎましょう」

私の姿をした少女は、男口調で私に話し掛けて来ました。

私はそれに従い、すぐに魔物の居る場所へ向かいます。

自分の前に自分が現れたにも関わらず、あっさりし過ぎているかもしれませんが、特に話すこともありませんし。

ダブルハート  
二つの心、これは私のオリジナル魔術です。

自分で魔法陣を研究し、自分にしか使えない魔術を開発しました。

魔法陣の形は、その効果によって、大きく違います。

攻撃系ならば、五芒星を中心に描かれ、援護系ならば、六芒星を中心に描かれます。

他にも、細々とした内容にはそれぞれ異なる呪語ルーンを刻んだり、それをバランス良く繋げる紋様があったりと、様々です。

そんな中でも、色々の違いがあり、それらを研究し、形を理論的に変形させることによって、新たな魔術を生み出すことができるのです。

この魔術の場合は、生物の肉体に作用する魔法陣と、精神に作用する魔法陣を研究し、組み合わせることによって生み出された魔術です。

分身と分心、この両方が同時に起き、全く違う心を持った分身が現れます。

とはいえ、全く違うと言っても、それは元々自分の中にあっただ心であり、普段表に出てこないだけですけど。

つまり、今の私は、身も心も完全に女というわけです。

別に女性のことは好きではありませんし、おしゃれには興味がありません。

しかし、そんなことをするために発動させた魔術でもないのです、さっさと目的を終わらせてしましましょう。

靴の裏に描いた魔法陣に魔力を流し、魔術を発動させます。すると、私の体はとんでもない速さで動き出しました。

<sup>ダッシュ</sup>爆走、脚力をかなり引き上げる魔術です。

これを使った状態ならば、壁を走ることも可能です。天井は流石に無理ですけど。

私は一分も掛からずに魔物が暴れている場所に到着しました。

そこでは、何人かの冒険者っぽい人たちが、赤い毛並みのゴリラ魔物を相手にしています。

なんとか翻弄して時間を稼いでいますが、ダメージは与えられていないようです。

姿を見せてパニックを起こさせるわけにもいきませんし、私は姿隠しの魔術を使ったまま、赤いゴリラを倒すことにしました。

「<sup>アルマダーリオ</sup>風よ踊れ」

私は手袋をはめた左手の平の部分に魔力を流し込み、呪文を唱えます。

すると、私の左手の平に描かれた魔法陣は光輝きました。

光が収まるよりも早く私の左手に風が収束しはじめ、渦巻いていきます。

それはどんどん大きくなり、やがて私の手を離れ、台風のようにゴリラに近づきます。

周りにいた人たちはそれに気がつき、ギリギリで直撃を免れましたが、ゴリラは風に呑み込まれ、渦の中でバラバラになりました。とりあえず、私の仕事はこれで終わりですね。

## 十九話 Aランクチーム

爆走の魔術を使いながら、俺は街を走る。

一体はマリア（女）が始末してくれるだろうから、俺はもう一体に集中すれば良い。

ちなみに、分身前に使った魔術は俺にもかかっているため、誰にも姿は見えない。

それにしても、こうしてちゃんとした男の心に戻れたのはいつぶりだろうか。

普段は口調なんか女の方に持つてかかれているからな。

精神の核なんかは俺が大きく締めているから問題ないけどな。

昔、生物の授業で遺伝子について習ったことがある。

男か女かを決める遺伝子が存在しているのだ。

問題はそこではなく、心を決める遺伝子があるという話だ。

それがどこにあるのかは解明されていないが、女には女の心を持つ遺伝子が、男には男の心を持つ遺伝子があるんだそうだ。

予想だが、俺の中に女の心が生まれたのはそのせいだろう。

俺の体は女だ。そればかりは魔術でもどうにも出来なかった。

そして、女には女の心を持たせる遺伝子がある。

だから、俺がこの世界に女の体で転生した時点で、俺の心の一部が女になっていたのだ。もしくは、もう一つの心が生まれたかだな。

しかし、別に俺は二重人格というわけでもないので、恐らくは前者が正しいだろう。

男の心の中に、小さな女の心が生まれた。  
考えたくはないが、そんな状態になった時、心は歪む。  
そして、俺の、いや、俺たちの心は、もう歪んでいるんだ。対策は  
練ってあるから問題は無いんだけどな。

心についてグダグダと考えながらも走っていた俺は、魔物を見つけた。

ちなみにチルはマリア（女）の肩にいる。

どちらかといえば、俺が二つの心で生み出された方だからな。

それはさておき

魔物は大きなアルマジロだった。

見た目はそれなりに愛らしい？ のだが、その防御は堅く、冒険者

（たぶん）たちの攻撃が届いていない。

魔術で攻撃している人もいるのだが、全く効いていない。

しかし、アルマジロは建物に攻撃を仕掛けたりするので、放っておくわけにもいかない。

やっぱりここは、俺の出番か。

そう思い、魔力を動かさそうとしたが、やめた。

強力な魔力を感じたのだ。

恐らく、その人物、いや人物たちなら、アルマジロにも勝てるだろう。

俺は魔力発生源であろう建物を凝視していると、その中から五人組の冒険者（たぶん）が現れた。  
種族はバラバラだが、全員魔力を持っている。魔法使いだ。  
しかし、それだけに頼っているわけではないようで、それぞれ違う得物を持っている。

「行くぞ！ お前ら！」

恐らくチームなのだろう。リーダーらしき体格の良い人間のおっさんが声ライカンスロープを掛けると、狼人の女性と、剛人の男性ドワーフがそれぞれ、戦斧と鎚を構えてアルマジロに近づいていった。  
その後、リーダーっぽいおっさんが大剣を構えて続く。  
それを後ろから援護する、人間の女性と、小人ホビットの少年。女性は杖を持っていて、少年は弓を引いている。

「ギャオオオオー！！！！？」

アルマジロは特に気にすることはなくのんびりとしていたが、急に叫び声を上げた。  
理由は簡単、剛人の男性が叩きつけた鎚は、アルマジロの堅い甲羅にひびを入れたからだ。  
しかもそこに、間髪入れず狼人の女性が戦斧を振り下ろす。  
甲羅の破片がパラパラと舞い、戦斧の刃が体に食い込んだ。

女性はすぐに戦斧をアルマジロから放し、自分も距離を取る。アルマジロ甲羅の一部がなくなり、血の滴る肉が見えていた。これには流石のアルマジロも怒ったようで、大きな目で冒険者たちを睨み付ける。

しかし、その目はいきなり飛んで来た弓矢に潰された。

「ギャオオオオーーッッッ!!」

痛みで悲鳴を上げるアルマジロの傷口に、リーダーっぽいおっさんは大剣を突き刺した。

剣は深々とアルマジロに突き刺さり、傷口を広げていく。

おっさんは剣の柄をぐいっと捻り、傷をえぐる。

そして、少し緩くなった傷口から大剣を引き抜き、アルマジロから離れる。

「ギャオオオオオーーッッッッ!!」

アルマジロは痛みでのたうち回り、周囲の建物を破壊する。

そんなアルマジロから、ボンッ! という音が聞こえたかと思うと、その巨体がゆっくりと倒れた。

どうやら人間の女性が魔術を使い、傷口辺りを爆発させたようだ。内側からの攻撃には耐えられなかったようで、アルマジロはピクリとも動かない。

これには結構驚いた。まさか魔法を使わないで倒すとは思って無かったし、もしもの時は俺が出て行くつもりだった。

しかしまあ、実力者つてのも居るもんだよな、少なからず。

俺は少し興味があったが、長居する事も出来ないので、姿を隠したままその場所に突っ立っていた。

そして、アルマジロの死が確認された同時に、凄い歓声が鳴り響いた。

聞き取れた単語でわかるのは、アルマジロを倒した人たちはAランクの冒険者チームらしく、そのチーム名が”アーケラル”であることくらいだった。

そして、俺の体は消えていき、意識はまた一つに混ざり合った。

## 二十話 遊びじゃない

天使の瞳と二つの心、それと姿隠しの魔術を解除して、シャルさんに合流しました。

天使の瞳は、解除しても瞳がなくなることはありません。周囲を完全に把握する力がなくなるだけです。

というか、元に戻らなかつたらさすがに使えませんよ。

それはさておき

目を潰した時に流れた血は拭ってあります。

シャルさんに無駄な心配はしてほしくありませんから。

そして今は、シャルさんと魔物のことを話しています。

「マリア、無差別転送魔術と叫んでいたが、どういうことだ？」  
「言葉の通りです。どこかのバカが、魔物を無差別に転送したんでしょっ」

いや、範囲指定転送の確率が高いですね。

そうでなければ、ここ周辺だけに魔物が現れたのは不自然ですし…。

しかし、何の目的があつてここに魔物を？

「ふむ、それは誰にでも出来るようなことなのか？」

「ありえません。かなり魔術の知識があり、強力な魔力結晶を持っているか、強力な魔力を体内に持っている者でなければ不可能です」

あれはとんでもなく魔力を消費しますからね。

そんじょそこらの魔法使いでは、百人も集めなければ発動しませんよ。

魔力結晶を使う場合でも、かなりの数が必要ですし。

……、いや、待ってくださいよ……。これは……。

「シャルさん、こんなことが出来る魔術師なんてかなり限られるんですよ」

「まあ、そうだろうな。だとすれば、犯人はすぐに捕まるだろう。それほど強力な魔力を持っている者など、数人しかいないからな」

普通ならそうですね。容疑者が絞られれば、犯人に辿り着くのは簡単ですから。

しかし、これはもしかすると……。

確信はありませんが、とっても嫌な予感がします。

「これをやった魔術師を探します。もしかすると最悪な展開になっているかもしれない。シャルさんは、国の遣いかなにかが来たら、適当に説明しておいて下さい」

「わかった」

シャルさんに後のことは任せ、私は少し焦りながら、人々が取り囲

む獅子の魔物に近づきました。

王国の騎士隊が来るまでは誰も触らないようにしているらしく、ドーナツ状の円形に人が集まっています。

私はそれをかき分け、獅子の魔物の死骸に近づき、残っている下半身の一部に触れました。

転送魔術に使われた魔力が、まだ残っているかもしれないんです。それを逆探知すれば、相手の魔術師の居場所がわかるはずですよ。

私は服のポケットから黒い液体の入ったビンを取り出し、右手の人差し指に付け、獅子の死骸の一部に魔法陣を描きます。

私はありとあらゆる魔術の魔法陣を記憶していて、墨やら血やらがあれば、大抵のモノは描けるのです。

魔法陣を描き終えた私は、その魔法陣に右手を添えて、自らの魔力を流し込みます。

すると、魔法陣は光輝き、私の頭の中には、相手の魔術師の姿が浮かび上がりました。

そいつは、自分の魔術が成功したことを喜びながら、誰かに話し掛けています。

相手は、子供。しかもボロボロで、痩せこけていいいます。

その子供の表情は恐怖に満ちていました。

場所は、把握しました。……殺します。

「ちょっと待って下さい！」

私が殺意を抑えようともせず、魔力の操作を始めようとすると、一人の少年が話し掛けていました。少年は、私の殺気に当たって震えています。

「なんのようですか？ 私は急いでいます」

「あ、あの助けてくれてありがとうございます！」

最初はなんのことを言っているのかわかりませんでした。よくよく見ると、その少年はさっき私が獅子の魔物から助けた少年でした。しかし、今はそれどころではありません。

私は少年を無視して、転送魔術の起動を始めました。

「待って下さい！ 今のは僕の友達なんです！」

「……………感応魔法ですか？」

「は、はい」

感応魔法とは、固有魔法の一つで、相手の考えている事を読み取ったり、心を読んだりすることが可能な魔法だったはず。それほど数が多くない、珍しい魔法だったと思います。

しかし、この少年が感応魔法を使えるのだとすると、今私が逆探知した時に流れた映像を見たということですね。そして、あの子供が友達、と。

「助けてみせます。任せて下さい」

「あ、あの、僕も！」

「これは遊びではありません！」

私は少年を怒鳴りつけて黙らせ、転移魔術の魔法陣を地面に描きました。

そこに自らの魔力を注ぎ、魔術を発動します。

場所は相手が使っていた転送魔術の座標を元に行っているので問題ありません。

そして私は、その場から消えました。

## 二十一話 魔力結晶化

一瞬で辺りの光景が変わり、薄暗い地下室のような場所に変わりました。

その床には大きな魔法陣が描かれていて、その中心に体の下半身が青い結晶になっている少女が横たわっていました。少女の体は、少しずつ青い結晶に変化しています。

そして、その魔法陣の近くに、一人の男がいます。

向こうもこちらに気づいたようで、凄く驚いた表情をしています。

「リオラ ハーラ  
光の波動」

私は魔法陣の一部を消し飛ばし、魔術を妨害します。

それにより、少女の体が青い結晶になるのは止まりました。

しかし、まだ下半身は青い結晶のままです。

「貴様何者だ！　なんてことをしてくれただ！」

「……何人ですか？」

「は？」

「今まで魔力結晶化させた子供は、何人だって聞いてるんですよ！！！」

魔力結晶化。大気中に漂う魔力を人間の体に集め、命力と結びつけることにより、人体を強力な魔力結晶に変えることです。命力は命の源であり、それがなくなれば生物は死にます。

命力と魔力を結びつかせるといふことは、生物を無生物に変えるといふことです。

それは禁断の魔術であり、絶対に行ってはいけない禁忌。それを、この男は、破りました。

「ぶち殺しますッ!!」

「くっ！ 一体何だというのだ……!!」

男は部屋から逃げ出しました。

しかし私は、そんなことを許しません。

右手の平に魔力を流し込み、強力な魔力を発動させます。

男が逃げた方向に手をかざすと、右手の平が一瞬光り、次の瞬間には、壁が吹き飛んでいました。

呪文を唱えないのは、すでに力加減をするつもりがないからです。

呪文とは、攻撃魔術の威力を調整するためのものですから。

「はあはあ………っ！ ひ、ひいいいっ!!」

「何人だつて、聞いてるんですよ?」

私は部屋から通路に出て瓦礫を見下ろします。

男は粉々になった壁の瓦礫の中から這い出て来ると、悲鳴を上げました。

恐らく、殺気を当てられたことなど、初めてなのでしょう。腰が抜けて立てなくなっています。



を発生させました。

それは魔物ごとこの通路の天井をぶち抜き、空の彼方まで魔物を吹き飛ばしました。

穴の開いた天井からは、心地よい日差しが降り注いでいます。

「ひ、一人だ！ まだたった一人しか使っていない！ だから許してくれ！」

「……………一人、しか？」

怯えたように男はそう言ってきました。

ですが、ふざけないで下さいよ……………。

一人だったら殺しても良いって言うんですか？

そんなわけないでしょう。ありえませんよ。

「ふざけんじやないですよおおおおおおおおー……………！！！！！！」

私は男を思いきり、天井の穴に向けて殴り飛ばしました。

男は一瞬で気絶し、放物線を描いて飛んでいきました。

あと数秒で、この地下の上に落ちるはずです。

私はとりあえず男は無視して、魔力結晶化しつつある少女に近寄りました。

少女に意識はありませんが、かなりうなされています。

「う……う……」

「魔力結晶化を治す魔術、そんなの習ってませんよ、お婆さん！」

私は文句を言いながらも、少女を助ける方法を考えます。

魔力結晶化は、魔力と命力が結びついて、体を少しずつ魔力結晶に変える。

ということは、魔力と命力を分解する魔術を使えばいいということですね。

しかしそんな魔術は聞いた事無いですし、自分で作るしかありません……。

そう思い、辺りを見回すと、いくつかの本が散乱していました。

それを手にとってパラパラと見てみると、魔力結晶化の魔術について書かれた本だったようです。

しかし、それでは意味が……！！　そうです！　この魔法陣を逆算すれば！！

私は本に描かれている魔法陣をじっくりと見つめ、その理論を頭に叩き込みます。

魔力と命力の操作、物を結びつける、体の物質の変化、魔力の吸収、意思の封印。

だとすれば、魔力と命力の操作と物質変化の部分は変更の必要がありませんね。

物を分解し、魔力を放出させ、意思を呼び戻す、この三つを魔法陣に組み込めば、なんとかかなりそうです。

私は、堅い床に魔法陣を描き始めました。

分解の呪語はダオール、魔力の呪語はエドル、放出の呪語はラビー  
ネ、意思の呪語はジューダ、目覚めの呪語はビグド、これを魔法陣  
の一部として組み込み、六芒星を描き、円で囲み、更にそれをつな  
ぎ合わせるための紋様を描きます。

……出来ました！ 正直ぶっつけ本番な上に、考える時間も少な  
かったのでうまく行くかわかりませんが、やらないよりはマシです。  
私は少女を魔法陣の上に運び、魔法陣に魔力を流し込みました。  
魔法陣は今までのものとは比べものにならない程に輝き、そしてそ  
の光りが収まると

完全に結晶化した少女が横たわっていました。

二十二話 終わってない(前書き)

いつもより短いです

## 二十二話 終わってない

「え？」

目の前の光景が信じられませんでした。

私が助けようとした少女は、私の手によって命を失ってしまいました。

なんですか？ どうしてですか？

失敗するにしても、なにも起きないはずでした。

それがどうして、完全な結晶化を起こしているんですか？

「あ、ああ……ああああー……っっっ！！！！」

魔力が暴走して制御が出来ません。

膨大な魔力が、私の体から放出されます。

部屋全体に亀裂が入り、パラパラと破片が落ちてきます。

パキッ！

何かが聞こえました。

しかし、私はそんなことを気にすることは出来ませんでした。

目の前が、真っ暗になっていきます。

どうしてですか？ 助けるために手に入れた力なのに、どうして傷つけてしまったんですか？

私はなんのために強くなったんですか？　そうです……助けるためじゃないですか。助けるためじゃ、ないですかっ！！

「まだ、です！　まだ終わってません！」

魔力結晶になったからと言って、元に戻せないと決まったわけではありません！  
魔力結晶化は命力と魔力の結びつきにより起こる現象、それはつまり、命力はまだ失われていないと言っことです！　今ならまだ間に合はずです！

助けます！　絶対に！　助けて見せます！

パキパキッ！

なんの音でしょうか？

私はその音の発信源を見て、硬直しました。

それは結晶化した少女の発する音で、その結晶にひびが入っていく音でした。

「そん、な……」

私が人を助けることは、そんなにいけないことですか？

私が運命に抗うことは、そんなに罪なことですか？  
私が、世界を変えることは、そんなに間違ったことですか!？

「それでも！ 私はあああー！ー！ー！ー！ー！ー！」

諦めきれないんですよおおおおおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

私はもう一度、急いで魔法陣に魔力を注ぎます。

さっきよりも膨大な、魔法陣が耐えられる限界まで魔力を注ぎ込みます。

そして魔法陣が、とても大きな光りを発しました。

パキーンッ！！

部屋一杯に光りが広がり、大きな音が響きました。

なにが起きたのか、なにを起こせたのか、なにが起きてしまったのか、わかりませんでした。

さっきの魔力暴走のせいで、魔力がほとんど残っていません。それに加えて、魔法陣には残る魔力を全て注ぎ込みました。

最早、気力が残っていません。張り詰めていた糸が切れました。私の意識は、なにも確認出来ず、暗闇にしずんでいきました。

私は……どうして……？

どうして？

この世界に、居るんでしょうか？

それは……、自分で決めることなんじゃないかな？

自分で、ですか？

そう、自分で

そんなの、無理ですよ

そんなことないよ

私に、出来るのでしょうか？

出来るさ。だって君は、僕の

なんだから

あなたは……？

僕かい？ 僕は君を、大切に思っている者の、一人さ

私を、大切に……？

っ、  
そうだよ。けどももう時間みたいだ。僕はもう行くから、頑張  
って、。

っ！！ 待って下さい！ あなたは！？

## 二十三話 魔法学院の少女

「あなたは誰ですか!？」  
「忘れて、しまったのか……? 私はシャル。君に助けられた人間だ」

……あれは夢、だったんですね。  
だとしたら、あれは私だったのでしょうか?

頑張つて、ユウキ

どうして、今更そんな名前を、思い出してしまったんでしょうね。  
今まで、考えたことも、なかったんですけどね……。

「マリア、お前、本当に……」  
「え? ああ、シャルさんじゃないですか。どうしたんですか?」

なにかあったのでしょうか?  
なんだかとても悲しそうな顔していたので、なにかあったのかを聞くと、シャルさんの頬が、赤く染まりました。どうしたんでしょうか?

私は首をかしげ、シャルさんの顔をのぞき込みます。

「覚えているんじゃないか!！」  
「え、ええ!？」

何の話ですか!？ いきなり怒られても意味がわかりませんよ!  
つて、覚えている? 私は、なにをしていたんですたっけ?

……………っ!！ そうです! あの女の子は!？

「シャルさん! あの子は!？ あの子は無事なんですか!？」  
「あの子つて、誰のことだ? ああ、そういえば、マリアに会いた  
いと言っている子たちがいたな」

シャルさんは何か呟いて部屋から出て行きました。  
そういえば、ここはどここの部屋なんでしょうか?

見た感じでは、星月の宿ではありませんし、雲水の宿でもない気が  
します。

なんとというか、高級な感じがします。  
私の乗っているベッドも、ふかふかしていますし。

私が部屋の観察を行っているとき、シャルさんが誰かを連れて帰って  
きました。

一人は、私が獅子の魔物から助けた少年で、もう一人は、魔力結晶  
化したはずの少女でした。

「た、助かったんですね!？」  
「ふえ? うわわ!！」

私はベッドが飛び起き、少女の肩を揺さぶります。  
少女はそれに驚き、目を回してしまいました。  
私はハツとなり手を離し、少女の体を見回しました。  
特に変わったところはありませんが、縮みました？

「あの、なんだか、小さくなっていますか？」

「あ、はい。一年分の肉体の成長が魔力結晶になって砕けたみたい、です。私は魔力結晶に覆われていた状態で、それが砕けて中から出て、きました。理論はよくわからないんです、けど」

「そうだったんですか……」。

あの時間こえた結晶の碎ける音は、表面が碎ける音だったんですね。私の描いた魔方阵にそんな呪語は使っていませんが、魔術は奥が深いのですからね。そんな小さなことを気にするよりも、この子が助かったという事実が大切です。

良かったです。本当に、良かったです。

「それにしても、魔術に詳しいですね？」

「あ、はい。私も、魔法学院の生徒、ですから」

私も？ いや、ちょっと待って下さいよ、たしかあの男、魔法学院の学院長って言ってませんでしたか？

「てことはあの男、自分の生徒に手を出したってことですか？」

「ふざけてますね。そういえばあの男はどうしたんでしょうか？」

「学院長は捕まりました。今まで犯していた罪もばれました」

「あ、はあ、そうですね……」

私の考えていた疑問に、感応魔法の使い手である少年が答えてくれました。

「というか、考えていることがモロバレってかなり困るんですけど？」

「一応魔術でロツクを掛けておきましょう。」

「精神系の魔法に対する魔術は結構豊富ですからねー。」

「それはそれとして、ここはどこですか？ あなたが無事だったことは幸いですけど、いきなり拉致されるとは思っていませんでしたよ」

「いや、ここは王国の施療院だ。外で騎士が待っているから、大丈夫なようなら外に出るぞ」

「騎士が待っているって、どうしてですかね？」

「今回の事件についてなにか聞かれるのでしょうか？」

「面倒くさいですねー。なんでこうトラブルが舞い込んでくるんですかねー？」

「魔力切れで少し体が重いですが、とりあえず問題はありませんよ」  
「そうか、それじゃあ行くぞ。二人はもう帰れ」

シャルさんは二人にその声を掛けましたが、二人は部屋から出て行かず、私の方に向き直りました。

少年は少し不安そうな、少女は少し嬉しそうな表情をしています。

「助けて頂き、ありがとうございます、ました。私は、アンドリオ魔法学院一年のキャラ、です。もうお気づきでしょうが、猫人<sup>ワーカー</sup>、です」  
「キャラを助けてくれてありがとうございます。僕はアンドリオ魔法学院一年のマルスです。えっと、人間です」

そういえばまだちゃんと自己紹介していませんでしたね。

猫人のキャラに、人間のマルスですか。

二人とも魔法学院の生徒だったんですね。

「私はマリア・ディオオーネです。一応言っておきますが、十五歳の竜人です」

「えっ!?! 十五歳!?!」

「失礼な驚きですね……。まあいいです。私も色々聞きたいことがありますから、後日星月の宿を訪ねてくれませんか? もしくは、私とその魔法学院に向かいます」

キャラちゃんやマルスくんのことを詳しく聞かなくてはいけませんしね。

一体どうしてあんな地下に捕まっていたのか、なんかを聞きたいところですよ。

しかし、とりあえず優先順位は騎士隊とやらが先ですかね。

「わかりました。明日、星月の宿をキャロと二人で尋ねます」  
「そうですか、それでは」

私は二人にそう告げて、シャルさんと一緒に部屋を出ました。  
それにしても、本当に何の話をするんでしょうね？

## 二十四話 騎士隊の詰め所

今回の魔物転送事件の黒幕は捕まりましたが、それと同時に新たな問題が浮上しました。

それは、暗闇の世界とやらです。

近年魔物が大量に発生しているのはこいつらのせいで間違いないでしょう。

魔法学院の学院長までそれに取り込まれていると考えると、他にもお偉いどころには注意しなくてはいけない可能性がありますね。

それはそれとして、いい加減にして欲しいんですけど？

いつまでこの尋問のようなものは続くんでしょう？

「だから、君はどのような魔術を使いあの地下室に行ったんだ？」

「ですからー、あの男が使った転送魔術を逆探知して、その位置を座標的に理解し、転移魔術を使って行ったと言っているじゃないですか」

さつきからこんな感じの会話が延々続いています。

どうせ理解出来ないのに、それを認めようとしないでしょくく聞いてくるんですよ。

魔術を使える騎士はいないんですかねー？

「もう少しわかりやすく説明できるのか？」

「無理ですね。そもそも魔術を理解していない者に理解出来る話で

はありませんので」

本当に面倒な人たちですねー。

ええっと、青銅騎士隊、でしたっけ？

街の平和を願っている良い人たちなんでしょうけど、ここまでしつこいとうんざりです。

「もう良いぞ、なにがあつたのかは大体わかった」

「た、隊長！ いいんですか？」

「ああ。嬢ちゃんの話には筋が通っているし、魔術の話も嘘ではないだろう」

「ありがとうございます。それじゃあ、もう帰ってもいいですか？」

近くで壁によりかかっていた人間の男の人が、助け船を出してくれました。

話ができる人が隊長で良かったです。

シャルさんの方はもう終わっているでしょうし、早く帰りたいです。まだ王都に来て二日目だというのに、問題が発生し過ぎなんですよ。

「いや、もう一つ聞きたいことがある」

「はあ、なんですか？」

椅子から立ち上がろうとしましたが、隊長さんの言葉で力を抜きます。

特に話すことも残っていないと思うのですが？ 少なくとも私とし

ては。

「君が表彰を望むかだ」

「はい！？ 表彰！？」

表彰って、あれですか？ 学校とかで賞状貰ったりした奴ですか？ 絶対いやなんですけど……。前世でも表彰されたことなんて一回もありませんよ。

あ、卒業式のやつは含まれないですよ？ ノーカンです、ノーカン。

「街に突然魔物が現れたというのに、今回、被害がかなり少なかったのは君のおかげでもある」

「すみません、私そういうのは苦手ですから。丁重にお断りします」

表彰はいやですよ、さすがに。恥ずかしいじゃないですか。

私は丁寧に表彰をお断りしました。

隊長さんはいささか残念そうな顔をしましたが、仕方ないんです。

「そうか、ならば仕方ないな。最後に一つ、試したいことがある」

「なんですか？」

「力比べをしないか？」

そう言って隊長さんは、机に右肘をつきました。

腕相撲をしようってことでしょうか？

私の力量を図る、とかそういうことでしょうか？

まあ、組み手とかよりは簡単ですし、問題はありませんか。

「わかりました」

私も右肘を机につき、隊長さんの手を握ります。

すると、隊員の人が近づいてきて、私たちの手を包み込むように押さえました。

「Ready Fight！」

発音めっちゃいいですね！

私は心の中でツツコミながらも、軽く力を入れました。すると、隊長さんの手が一瞬で机に付きました。

周りの隊員さんたちは、信じられないものを見るような目で私を見ています。

「私の勝ちですね」

「ああ、俺の負けだ。俺はゴードン、お嬢ちゃんは？」

「マリアです。それでは」

ゴードンさんも本気ではありませんでしたね。

次に会った時は、殴り合いか斬り合いをしたいです。

当然魔法と魔術は抜きですよ。

私が詰め所の外に出ると、待っていたシャルさんが近づいてきました。

少し不満そうな顔をしています。

「すみません、遅くなりました」

「いや、気にしていない。それよりもなんだ、あの騎士たちの対応は」

シャルさんは今回の事件にあまり関わっていないので、ほとんどのにも聞かれなかったそうです。

どうやらそれが不満だったようですね。

あまり根掘り葉掘り聞かれるのもいい気分ではないんですけどね。

「まあ、アークラルを見れたのは良かったな」

「アークラル……、はて？」

どこかで聞いたような……？

ええっと、たしか魔物の時の……。

「ああ、あの五人組のAランクチームですね！」

「知っていたのか？」

「まあ、少しですけど」

さすがにAランク、という強さのチームでしたしね。  
少し印象に残っています。

そういえばあの人たちも一応今回の件に関わってますしね。  
私より深く関わってはいませんが、シャルさんよりは関わったでしょうから、話を聞かれていますのでしょう。

しかしまあ、私にはもう関係のないことですかね……。

「明日はなにか予定があるのか？」

「いえ、明日はゆっくり過ごすつもりですよー」

二日連続で色々あって疲れましたしー。

そういえばあの男が範囲転送魔術であの周辺を狙ったのはどうして  
だったんですかねー？

今度ここの騎士隊の人に聞いてみますかねー。

「ピー！」

「あ、チル。どこ行ってたんですか？」

チルが空を、ピーと鳴きながら、空を飛んで来ました。

私一人であの男の所に転移してから姿が見えませんでしたね。

まあ、あの転移魔術は自分しか転移出来ませんし、仕方無いですが  
ね。

「明日はまったり過すごしましょうね」  
「プー」

私の言葉に応えるようにチルは鳴きました。  
そして、私たちは星月の宿へと帰るのです。

「ゴールドレンレオってAランクだぞ!？」

「おい、お前ら知ってるか？」

「ん？ なにをだ？」

「あ、もしかして白銀の魔女の噂か？」

「そうそう、よくわかったな」

「なんだそれ？」

「ああ、お前今日は仕事に出てたんだっけ？」

「なら知らないのも無理はねえな。実は今日、この周辺に三体の魔物がいきなり現れたんだ」

「な!？ おいおい冗談だろ？ ここは王都だぞ？」

「いや、本当なんだ。今日の朝方の話だから、まだ詳しくは知らされてないんだが、噂ではどっかの魔法学院の仕業らしい」

「そうそう。それで、その内の一体をアーケラルが倒したんだよ」

「アーケラルってあのAランクのか!？ うわー、俺も見たかったー!」

「俺たちも実際に見たわけじゃないけどな」

「まあ、それはまだわかるだろ？ Aランクチームなら、アルマケロス不倒すことくらいわからないだろ」

「アルマケロス！？ Bランクの魔物だろ！？ そんなのをどうやって飼いだらしてたんだよ、魔法学院の連中は」

「だから詳しくは知らないし噂だったの。まあそれで一体は減っただろ。それで白銀の魔女が倒したのが、ゴールドンレオだったんだよ」

「俺はそれを実際に見てたんだが、一撃で上半身のほとんどが消し飛ばされてたぞ」

「嘘だろ！？ ゴールドンレオってAランクだぞ！？ どんだけ恐ろしい女なんだよ！」

「いや、それがそうでもないらしいぞ。こいつの話では」

「実際見たって言っただろ？ 凄く可愛い女の子だった。髪は銀色で瞳は碧色、ローブを羽織って肩に青い小鳥を乗せてたな。年は十二か十一くらいだったと思う」

「マジかよ。そんな女の子がゴールドンレオを一撃で？ 魔女っていつくらいだから、魔術師なのか？」

「そうらしいな。なんでも手袋が一瞬光ってそこから白いエネルギーみたいなのが飛び出したんだと」

「そうなんだよ。だから白銀の魔女。しかもこの宿主に聞いたところ、最近ここに住み着いていた闇夜の番犬も、白銀の魔女がボコ

ポコにして追い出したらしいぞ」

「うわっ、闇夜の番犬かぁ。あいつら嫌な奴らだったよなぁ……」

「だろ？ それもあって、白銀の魔女は結構慕われてるみたいだな」

「ちなみに、この宿の二階に泊まってるらしいぞ」

「マジで！？ ヤベエ、一目見たくなってきた」

「やっぱり？ 俺もそう思ったんだけどさぁ、部屋に押しかけるわけにもいかないだろ？ それに、宿主が白銀の魔女はもう寝てるって言ってたしな」

「随分早い就寝だな。まあ、見た目には合ってるか」

「うーん、じゃあ明日の朝この宿の一階で待ち伏せするか？」

「おっ、いいねえ。チラッと見るだけなら別に迷惑にもならないだろっしな」

「いや、止めといた方がいいぞ」

「え？ なんでだよ？」

「ああー、なんとなくわかる……」

「まず第一に、同じ考えの奴が大量にいる」

「は！？」

「周り見てみるよ。昨日まで闇夜の番犬がいたのに、もうこんなに賑わってるなんておかしいだろ？」

「そういうことだ。そして第二に、ロリコンのお前は絶対惚れる」

「え、そんなに可愛いのか？」

「おい、なにちょっと興味もってんだよ」

「今はまだ俺の守備範囲外だが、あと十年もすればかなりの美人になるな」

「ほう、それはそれは……」

「人間なら、だろ？ この国は色々な種族がいるから、もしかすると竜人なんてこともありえるぞ？」

「いやいや、それはないだろ、流石に」

「竜人って成長が凄い遅いんだよな……」

「あ、こいつやばい」

「見たら本当に惚れそうだな」

「一生幸せにするから大丈夫だ」

「とりあえず一旦正気に戻れ」

「ま、そういつこった。待ち伏せするならそれなりに覚悟しておけよ」

「ああ、金はしっかりと貯めてある。子供が出来ても大丈夫だ」

「なんの覚悟だよ!？」

「うし、じゃあとりあえずこの話は置いて、魔物の方に戻るぞ」

「え？ まだなんかあるのか？」

「現れた魔物は三体って言っただろ？ あと一体残ってるだろうが」

「そう、そんでその魔物がレッドコング」

「レッドコングか。たしかCランクだったな」

「そう、それなりの魔物だ。このレッドコングが、いきなり現れた竜巻に呑み込まれてバラバラになった」

「んで、その竜巻は、誰が発生させたモノなのかわからないらしいんだ」

「ふーん、白銀の魔女じゃね？」

「そう思うよな？ だけどその場所では誰もその姿を見てないんだよ」

「けど、白銀の魔女が凄腕の魔術師だとするなら、それも可能かもしれないけどな」

「つつかそんな凄い噂ばかり聞くと白銀の魔女がやったとしか考えられないんだが……」

「まあな。いつちよ明日話し掛けて聞いてみるか？」

「お前かなり酔ってるだろ？ 大胆になってるぞ」

「でも悪くない案だな。お知り合いにもなれるし……」

「そうだろうそうだろう！ よしそれじゃあ明日はここで待ち伏せだ！ それまで飲むぞー！」

「飲み過ぎて潰れるなよ」

「もう手遅れだろ」

二十五話 仲間（前書き）

しばし不定期更新になるので、ちょっと長めに書きました。

## 二十五話 仲間

「ん……うん……!？」

昨日と同じように、ふかふかのベッドの上で私は目を覚ましました。上半身だけをゆっくりとお越し、寝ぼけ眼で辺りを見回すと、二人の少年と少女が立っていました。

少女は私を見てニコニコしていますが、少年は気まずそうに目を逸らしています。

私は驚いて目をゴシゴシと擦りもう一度二人を見ると、それはキヤロちゃんとマルスくんでした。

「え!？ 二人ともどうしてここにいますか!？」

「あ、あの、その前に、服をちゃんと着てくれませんか……?」

マルスくんは私のことを視界に入れないように俯いてそう言ってきました。

なんのことかと思い、自分の体を見ると、身につけているモノが下着だけでした。

私は普段の生活で基本的にローブを脱ぐことはありませんが、入浴や就寝の時は流石に脱ぎます。更に言えば、私は寝る時基本下着しか着ない主義です。暑いんですよね、この国。

それにしても、なにか問題があるのでしょうか……、ああ、マルスくんは照れているんですね？

「私は気にしないので、とりあえずなぜここに居るのかを聞いてもいいですか？」

「昨日言われた通り、あの事件の話をしに来、ました」

「もうですか？ 随分早いですね……」

私はそう思い、キャロちゃんと話しながら時計を確認すると、すでにお昼の十二時を過ぎていました。

……時間の経過は早いですね。昨日は早めに就寝したはずですけど。

「どうやら待たせてしまったようですね。着替えるので少し待っていて下さい」

「はい、わかり、ました」

「あ、お昼の用意もしてあるので、着替えが終わったら食堂に行きましょう」

「そうですね、お腹も減りましたし」

私は昨日と同じように魔術で水を出現させ、顔を軽く洗います。

この世界には流石に水道はありませんので、水を使って何かする場合は、普通浴場まで行かなければいけません。しかし、浴場は一階にあるので、わざわざそんなところまで行きたく私は、魔術を使います。

その使い方はどうなんだ？ と思うかもしれませんが、本来魔術は攻撃のためにあるモノではないので、あながち間違っても居ないと思います。

そんなこんなで準備を終えた私たちは、チルを連れて一階の食堂に

降りてきました。

なにやら視線を感じるような気がします、まあ気のせいでしょう。私は食堂の椅子に座り、周りをざっと見てみました。

「なんだか昨日より賑わっていますねえ……？ この宿も人気が出てきたのでしょうか？」

「あ、いえ、恐らくこれは　「あー、お嬢さん、ちょっといいかな？」　こういうことですね……」

マルスクンの言葉を遮って、一人の男性が私に声を掛けてきました。マルスクンは少しげんなりした様子です。こうなるとわかっていましたでしょうか？

それに、見覚えがない男性です。一体なんの用ですかね？

私はマルスクンとキャロちゃんと食事をするので忙しいのですが……。

「なにか、用ですか？」

「いや、ちょっと聞きたいことがあってだな……、君が、白銀の魔女か？」

「やっぱり、ですか……」

「はあ……」

男性が意味のわからない単語を発すると、キャロちゃんとマルスクンは小声でなにか呟きました。

白銀の魔女ってなんですかね？　とりあえず私ではないと思うんですけど。

人違いですよ。そんな名前で呼ばれたことはありませんし。

「ええつと、私ではないと思いますよ？ 白銀の魔女という名前で呼ばれたことはありませんし……。人違いじゃないですかね？」

「あ、いや、じゃあ質問を変えよう。昨日ゴールデンレオを倒したのは、君かな？」

「ゴールデンレオ？ あの大きな獅子のことですか？ それなら多分私ですね」

魔物の名称なんて一々覚えてないからわかりませんね……。ですが、あの獅子は何気に毛色が金色だったような気がしなくもないですね。

そう考えると、この男性が言っているのは私のことでしょうか。白銀の魔女なんて知らないですけど。

「そうか！ やっぱり君か！ そうだ、もしよければ名前を教えてくださいませんか？」

「マリアです。あなたは？」

「俺はジヨナサン。冒険者をやっているんだ」

私の返答を聞いてかなりテンションが上がったこの男性は、ジヨナサンさんらしいです。

ジヨナサンさん、ですか。言いつらっ！！ ジヨナサンさんはかなり言いつらいですよ。

ジヨナサンでいいですかね？ というかいいですよ？

「俺のことはジヨナサンでいいぞ。言いづらいだろ？」

「そうですか。ではジヨナサン、私になにか用ですか？ まさかさつきのことを聞きためだけに私に話し掛けたわけじゃないでしょう？」

私は一瞬、目を細くしてジヨナサンを威嚇します。

正体不明の相手にへらへら出来るほど、私はできた竜人ではないんですよ。

するとジヨナサンは、少し焦りながら弁明を始めました。

「そう警戒しないでくれ、俺は君を仲間に誘おうと思ったただけなんだ」

「それは聞き捨てならないですね」

ジヨナサンの言葉に私が反応するよりも早く、マルスクンが立ち上がりました。

マルスクンはかなり険しい目つきでジヨナサンを睨み付けています。そしてなにを思ったのか、ジヨナサンもマルスクンを睨んでいます。更に、周囲の空気が一瞬変わりました。なんだかトゲトゲしいというか、抜け駆けされたという感じですかね？

「二人とも落ち着いて下さい。それで、仲間に誘うとは具体的にどういうことですか？」

「ああ、俺たちのチームに入らないか？」

「なるほど、そういうことですか。残念ですが、それは無理です」

ジヨナサンが私に悪意を持っているわけでないことはわかりましたが、現時点でジヨナサンの仲間になるのは不可能ですね。私の気持ち的にもそうですし、理論的にも無理です。

「どうしてだ？ なにか不都合があるのか？」

「そうですね、まず私は冒険者ではないので」

「それならば簡単に登録出来る。まだなにか問題があるんだろ？」

「……私を力としてしか見ない者に力を貸すことはできません」

昨日の私の活躍は、噂でかなり広がっているらしいです。

白銀の魔女というのは、噂が流れる上で勝手についた二つ名の可能性が高いですね。

そして、それを真つ先に確認したということは、私の力が目的なのでしょう。

私の力だけが必要とし、私自身を必要としない人に、私は力を貸したくありません。

「そ、そうじゃない！ 確かに君に興味を持ったのは噂からだ、今は純粹に仲間になってほしいと思っている！ 君と仲間になれるなら、今のチームを抜けてもいい！」

「チームを抜けてもいい、ですか……。私の力があれば他の仲間には必要ない？」

「違う！ 信じてくれ！ 俺は純粹な気持ちで君がほしいんだ！」

「いや、それはなんか違いますよ。愛の告白みたいになってますよ？」



だとすると、メンバーを集めなくてはいけませんね。誰がいいでしょう？ シャルさんは絶対に引き込みたいところですけど、無理強いはしたくないですね。

「あ、そういえばジョナサンの得物はなんですか？」

「お、俺か？ 俺はこれだ」

未だにテンパツた様子でジョナサンは、腰に付けていたガントレットを手に持ちました。

その甲の部分には、綺麗な石が輝いている。

これは、魔力結晶ですね。つまりジョナサンは、所持系魔法使いということですか。

「珍しいですね。しかしこれだと魔力切れの時に困りますよね？」

「いや、これは予備みたいなもんでな、俺の本当の得物は今持ってないんだ」

「ふむ、そうですか。ではまた明日、それを持ってここに来て下さい」

「ああ、わかった。仲間にチームを抜けることも伝えておく」

そう言つてジョナサンは少し離れたところに座っている二人の男性に近づいていきました。

どうやらお仲間も近くにいたようですね。

私はそれをチラッと見て、マルスくとキャロちゃんに視線を移しました。

二人は私が腹を抱えて大爆笑した時から放心状態です。どうしたん

でしょう？

「それにしても、お腹が減りましたね」

「マリア様、大変お待たせしました」

「あ、レイオスさん。盛況ですね」

「マリア様のおかげですよ。皆、マリア様を一目見ようとしたり、仲間に引き込もうと考えています」

まあそうでしょうね。

ジヨナサンはかなりおバカで面白い人でしたから仲間にしましたが、これから私に取り入ろうとしてくる連中は、そう簡単に仲間には出来ませんね。

それに、私にはやることがあるので、そんなに仕事は出来ませんしね。

168

「こんな生き方もまた、一興ですよ」

「マリア様は時折とても大人びていますね」

「ふふ、褒めてもなにも出ませんよ」

私はレイオスさんと軽い会話をしながら食事を進めます。

人と話ながら食べるのは行儀が悪いですが、いつものようにガツガツ食べないだけマシなので気にしないでほしいです。

「それでは、私は他のお客様のお相手もしなくてはいけないので、これで」

「はい、頑張ってください」

私は笑顔でレイオスさんを見送り、食事に集中します。

そして、私の食事が丁度終わる頃、キャロちゃんとマルスクくんが復活しました。

「ま、マリアさん！ 本当にあの男を仲間にするんですか！？」

「はい、なにか問題でもありますか？」

「大ありです！ なにを企んでいるのかもわからないですよ！」

「それは嘘ですね。マルスクくんはジョナサンの心の内を把握しているはずですよ」

私は目を細くしてマルスクくんを見つめます。

彼には感応魔法が使えます。ならば、ジョナサンがあの時なにを思い、考えていたのかわかっているはずですよ。

「っ！ たしかに、あの男は本気でした……。しかし！」

「マルスクくん、なにをそんなにカリカリしているんですか？ 言いたいことがあるならばつきり言って下さい」

「……わかりました。マリアさん、僕を弟子にして下さい！」

……はい？

## 二十六話 自らの力で（前書き）

しばし活動休止になります。すみません。

それと感想は返信していませんが参考にはさせて貰っています。指  
摘された箇所もいくつか修正しました。

## 二十六話 自らの力で

「は？ 弟子、ですか？」

「はい。マリアさんの元で、魔術を教わりたいんです」

「魔法学院で習えばいいでしょう？」

キヤロちゃんは魔術に詳しくかったですし、魔法学院は魔術を教えるくれるのでしよう。

魔法学院なのにどうして魔術なのかはよくわかりませんが、とりあえずそれは置いておくとして、学校で習えるならばわざわざ私の元で習う必要もないでしょう。

「僕は、魔法学院で成績トップなんですよ」

「えっ!？」

「ですけど、そんなもの知識的なことや、まだまだ未熟な学生たちの中ではです。この前みたいに、いざという時なにも出来ないようじゃなんの意味も無いんです。だから、マリアさんの弟子にしてほしいんです」

私が獅子の魔物を消し飛ばした時の話ですね。

しかし成績トップですか……。しかも、固有魔法を使える。

それほどの人材があんな危険な目に遭っても、学院の者は助けない、ですか……。

護衛くらい付いててもおかしくはないと思いますけど。

「一つ聞きますが、魔法学院には貴族の子も入学しているのですか

「？」

「あ、はい。というより、貴族の方が比率は多いんです。普通は貴族しか通えません、から。私たちは貴族じゃありません、けど。固有魔法を使える子供は、平民でも無料で学園に通わせて貰えるんです」

「なるほど。ではもう一つ聞きます。魔法学院の学院長。あれの子供も入学したりしますか？」

「してません。学院長に子供は居なかったはず、です。でも、魔法学院に多額の寄付をしている貴族の子が居たはず、です。成績は二位、でした」

なるほど、キャロちゃんの話が本当ならば、学院長は魔物をマルスクんの近くに転送したという可能性が高いですね。

懇意にしてもらっている貴族の子が二位で、普通の子が一位ですからね。マルスクんがいなくなれば自然と二位の子は一位になりますし。まあ、仮定ですけど。学院長がどうやってマルスクんの居場所を知ったのかもよくわかりません。しかし、まず間違いなしでしょう。腐った大人ですね。

あとさらに聞き流してしまいました、固有魔法を使えるなら平民が入れるということは、キャロちゃんもなにか固有魔法を使えるんです。まあ、とりあえずそれは置いておきましょう。

「マルスクん、私の弟子になるのは無理でしょう。魔法学院に通いながら私の元でというのは、無理があります」

「だったら魔法学院をやめます」

「それは……、もしかすると無理かもしれませんが」

「なんでですか!？」

「現在の魔法学院の学院長が、まともである可能性があるからです」

前の学院長のように、貴族の子供を鼻屑するような人ならば、マルスくんがいなくなるのは万々歳でしょう。

しかし、まともな人間ならば、成績トップの固有魔法持ち、しかも平民だから少し無茶な教え方をしても自分の立場が揺らぐことはない、そんな人材を逃すとは思えません。

つまりは、どんな手段を使ってもマルスくんを手元に置こうとするということですよ。

「マルスくんもわかっているんでしょう？ その可能性がないとは言いかねないことを」

「わかつて……、ますよ」

「身の丈に合った育ち方をして下さい。マルスくんもいずれは強くなれます」

「マリアさんは……、僕と大して変わらないのに凄く強いじゃないですか。今だって、思考を読まれないようにする魔術を使っているでしょう。そんなこと、普通の魔術師は出来ませんよ。常に魔力を消費し続けますから、魔力切れになる可能性もありますし……」  
「やっぱり私の思考を読もうとしてたんですか……。まあいいです。それと、私は普通じゃないんですよ。弟子入りは諦めて下さい。守りたいのなら、自らの力で」

守りたい者のために強くなりたい、マルスくんはきっとそう思っているでしょう。

守りたいのはキャラちゃんのことでしょうね。しかしそれならば、自らの力で強くならなければ意味がありません。私が言えた義理ではないんですけどね。

「……わかりました」

「ふふ、頑張つて下さい。さて、話を変えますが、キャラちゃんに聞きたいことがあります」

「なん、ですか？」

「キャラちゃんは どうして、学院長に捕まっていたのですか？ なにか理由があるんじゃないですか？」

誰でも良かった、とは思えないんですよ。

それに、魔力結晶化は体内に魔力があると更に強力な魔力結晶になると聞いた覚えがあります。キャラちゃんが固有魔法持ちだとすると、それも学院長に捕まった理由かもしれませぬ。

「たぶん、私が平民だから、です。学院の寮で眠っていたん、です。そして目が覚めたら、あそこに、いました」

「平民だから、ですか。貴族の子供が消えるのはまずくても、平民なら良かったということですか……」

「そうだと思います。それと私の固有魔法が魔力結晶化の魔術に向いていたからだと思ひ、ます」

「魔力結晶化に向いていた？ どういうことですか？」

「私の固有魔法は、吸収魔法、です。魔力を体内に持っている人は、空気中の魔力を取り込んで魔力を回復、します。そして私は、その吸収量が著しく多いん、です。他にも、魔力結晶の魔力を体内に取り込んだりも出来、ます」

「魔力を吸収する魔法ですか……。聞いたことありませんね。しかしだとすると、たしかに魔力結晶化の魔術には向いていますね」

空気中の魔力を体内に取り込むと自らの魔力に出来ませんが、その過程で命力と結びつくと体が魔力結晶化してしまいます。そして取り込む魔力量が多いほど回復出来る魔力が多いのです。それと同時に、多くの魔力が命力と結びつくと、より強力な魔力結晶になってしまふのです。

つまり学院長は、意図的にキャロちゃんを狙っていたということですね。

「大体わかりましたよ、今回の事件について。私から聞きたかったことはそれくらいですね。二人はなにかありますか？」

二人は私の問いに首を横に振りしました。  
それでは、とりあえずこれで解散ですね。

「私は行きたいところがあるのでもう行きます。二人も頑張ってください。困った時は力になりますから、いつでも頼って下さい」

「はい、わかりました」

「ありがとうございます、ます」

私は席を立ち、未だにお仲間さんと話しているジョナサンの手を引いて、星月の宿をあとにしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4734x/>

---

転生したのに竜人（ドラゴニア）！？

2011年11月7日00時08分発行